545
51

始

帝國圖書館藏

山

ほたるさは・らんせん

昭和二・一・五
帝國圖書館

545-51

大根畑のかゞやける青色をみながら

ババナの葉卷に火をつけて、紫の烟の立ちのぼるのをみながら、これを一本すつてゐるうちに、これが書けるだらうか……。ペンのはしる音が、水の流れる感じである。

「ちんせん叢書」の表紙には、本の名と、著者の名とがしるしてある。どちらも、黑い字である。たゞ、著者の名の「ほたるざわ●らんせん」に、御覽の通り、一箇の點がもちひてあつて、その「點」だけが、ゑび茶色になつてゐる。これは本來、濃い牡丹色といふ注文であつたのだが、注文通りにゆかずにゑび茶色になつた、しかし、ゑび茶色になつてみると。その方が却つてまた、澁くつていゝようだつたので、爾來ゑび茶色になつてゐる。

たゞ、一箇の點で、おまけに小さな點ではあるが、この點の、ゐび茶色であることは、一ト目みてすぐわかることだから、別に、この點の色は、これは、ゐび茶色である、と、ことはるにも及ばないとおもつてゐた。ところが此頃、この點のゐび茶色であることに、氣がつかないといふ人の、かなり多いことを知つて、驚いた。

表紙の紙の色は白い、――――（念の爲めだから、つゐでに、紙の色の白いこともことはつておく、もしもこの白さに氣のつかない人があると、氣の毒だから――――私は、紙の白色では、ケントの白がすきだから、この表紙にもケントをつかつた。尤も、ケントといつても、これは、和製の、印刷紙としてのケントだから、本物のケントにくらべれば、味はずつとわるいが、しかし、とにかく色は、ケントの白さである。

本の表紙に、ケントのような白いものをつかふといふ事は、よごれが目立つていけなからうといふような、實用むきな考へからは、これは、あまり喜ばれない事ではあらうが、しかし、本といふものは、最初の印象が大事だ、だから、みたばかりで、あゝいゝ本だな、と、おもはせる事が必要だ。「らんせん叢書」の表紙が、その必要をみたしえてゐるかどうかは問題だが、著者としては、大に意を用ひただけに、中には、「この表紙だけでも」と、いつてくれる人もたまにはある。

表紙の紙の色は白い、文字は黑い。白と黑とが、配色として、最上乘の部に屬するものであることは、別段、説明をしなくつても分るだらう。かりに白と黑とが、最上乘のものでないとしても、その白が白であり、その黑が黑であることは、説明をまたずに明瞭なことだ。その明瞭な事柄の中に、たゞ一點のゐ

び茶を用ひたといふ事が、あまり明瞭でないとすると、これは少々不思議だ。私の考へでは、白と黒とのハッキリした中に、たつた一點ゑび茶をいれたといふことは、明瞭といふことを、いはゞ二重に説明したようなつもりだのに、どうしてこれが注意の的とならなかつたか、注意の的とまではいかないまでも、せめて人目ぐらゐはひきそうなものだつたのに。

この叢書の第一篇「世界大戰の文化的價値」が出た時、友人星野梅耀君が、この裝釘を大へんほめてくれた。そうして、その時であつたか、それともその後であつたか、今ちよいと記憶がないが、星野君は、この、ゑび茶色の點を評して、「これ生命の點なり」といつたものだ。「生命の點」とは、いひもいつた。が、そうきいた時は、私はたゞ、知己の言として、我意を得たりと、うなづいたにすぎなかつたのだけれども、今、この「點」の色について、氣がつかない

といふ人の多くを知るに及んで、今更のごとく、といふと甚だ失禮な言ひ分ではあるが、「さすがに星野君である」と、星野君に對して、敬意を拂はずにはゐられない。なる程これは、星野君なればこそ、これを、「生命の點」とまでいひ得たのである。

ある、詩を好む青年に、星野君が、「これは生命の點だ」といつてきかした時に、この表紙のいゝ事を知つてゐるその青年にも、星野君のいつた意味が分らなかつた。またある人は、これが、ゑび茶色であることをよく知つてはゐたが、これが、何を意味するものであるかは分らなかつた。

意味が、あるとかないとかいふと、事がしちめんどうになる。意味なぞ、あるといへばあるし、ナーニ大した意味はないのさ、といつてしまへば、ない。どちらでもいゝ、なにしろこれは、學者が推論の結果として斷定した上でのゑ

び茶色ではないのだから、みた時にすぐ感じれば分るし、感じなければ分らない、分らなければ分らないで、それで、大した差支へにもなるまい、だが、こんなにもハッキリしてゐる色に、まるつきり氣がつかないでは、なんぼなんでもきまりがわるからう。

きはめて色の白い紙に、かすかな黒い線をひく。この、字の線がごく細いのは、紙の白い感じを、十二分に強く感じたからである。紙の白さが、この黒い線で、よけい白くなる。ここに字はありながら、字なぞ少しもないように、紙の白さの感じが強くなる。紙の白さの感じが強くなれば、それだけ、この黒い字が鮮明になる。鮮明になる字の方を主にして考へると、紙を白くしたのは、この、黒い、纖細だが強い線を、世にもめでたく、みごとな線にしたい爲めだともいへる。結果についてみる時。

字の色と、紙の色とのつりあひがよくとれて、調子がピッタリ合つて、これで、まことによく落ち着いた感じになる。だが、落ち着いただけではまだなんだか物足りない。また、あんまり落ちつきすぎてしまつても困る。この調子を破らう。破つた調子をつくらう。ポッリとうつたゐび茶色の一點が、この、調子を、やぶる。

この表紙は、これで一つの運動をはぢめた。意味といへば、これも、意味の一つである。あるひはまた、こゝに一つの花やかさを示したい。色彩である。色といふ、豊麗な氣分をさながらにあらはしたい。この一點のゐび茶色を凝視する時、この表紙の全體が、うつくしいゐび茶色になるこの華麗さ。

（彼れは、こんな風に存在してゐる、あだかもこの一點のゐび茶色が、こゝに燦としてかゞやいてゐる樣に、彼れは、こんな風に存在してゐる、この一點

は、彼れの血の動きをしめすものである――だがその存在が、ある人々には、まるで知られなかつた、皮肉さよ――）

ハッシと打ちこんだゑび茶色の釘、これは、この表紙といふ「一つの大きな建設」における、綜合生活的要領である。

けふの新聞をみると、きなふ、復興局の長官は、永代橋の金の釘を、金のハンマーでうちこんだ、この、金の釘と金のハンマーは、多少この本の表紙の、ゑび茶色の釘に似通つたところがある。

説明することのきらひな私も、とう〳〵説明をしてしまつた。何分、今の世界は説明の世界である。學者が説明する、驛夫が説明する、活辯が説明する、夜店の商人が説明する、説明と三度の食事とを、おなじほどに重要に考へる世界には、綜合生活者も、時としてまた餘儀なく説明する。

私は、人まねや受賣りが大きらひだ、また第一できもしない、だから、考へることも書くことも、みんな私の手製だ。少々粗末ではあるようだが、とにかくこゝへつくつてみせた。これは手製だ。これは新しいものである。説明はないが、新鮮な感じは、説明以上によく分らせるだらう。

これで分つてもらひたいのが、私の希望だ。

×

山は、ごく短い時間に、あまり多くのものをみてしまつた、感じがつよすぎて、しみ〴〵山を物語るといふような落ちつきが、まだどうも出て來ない。丁度、はぢめて飛鳥天平の藝術をみて驚いた時と、おなじような心持である。來年あたりから、そろ〳〵、山そのものがにぢみ出すような氣分で書けるように

なるだらうとおもふ。

感じといふものは妙なものだ、去年の、白馬や燕や槍やの印象は、どうもなんだか漠然として、書くのにも書きづらい樣な氣がして、それで、ことしの針ノ木から筆をつけはじめたのだが、さてその針ノ木がどうもおもふようなできでないのに、はぢめどうかとおもつた白馬以下の山々の方が、書きだしてみると、針ノ木よりもどうやら面白いものができたようだ。一年もたつと、忘れるような事はすつかり忘れてしまひ、忘れられない事だけが、整理されて、よくまとまつて殘るのかも知れない。

これが「山」の第一卷である。第二卷以下が、いつ、どんな順序で出るかはきめられないが、おそらく山は、私の生涯にわたつての記錄となるだらう。これも一つの自叙傳である。「吾が生活の記錄」。自然と人間との抱擁、「山」を讀む

人は、この點に注意して貰ひたい。

×

卷頭の寫眞は、友人、青海川龍一の自慢の作である。これは山である。槍ケ岳である。さすがに御自慢の作だけあつて、槍の面目は、實に躍然たるものがある。

青海川龍一は、この寫眞を「山」の卷頭にかざれよといふ。委細かしこまつて、この通り卷頭にかざるのである。

欅の葉がすつかり散つてしまつた、武藏野は冬である。

一點の雲もない空に、日は、こぼれるように光りをみなぎらしてゐる。
大根畑の大根の葉の青が、日にかゞやいて、今、天と地との注意がこれにあつまつてゐる。
冬といふものゝ豊さを、はじめて本當にあぢはい知る――――葉卷は、これが三本目だ。

大正十五年十二月三日

武藏國長崎村　らんせん莊の北窓にて　藍

一、針ノ木峠

針の木峠

淺間溫泉の宿の二階で、四五人の人と、晩餐をとつてゐるうちに、山の方の雲がだんだんとれて來た。正面の、低い山の鞍部に、遠く大きな雪のあつい山がみへる。信濃山岳會員の西澤君が、「あれが乘鞍です」といふ。たそがれの色はもう野にせまつてゐるが、山はまだあかるい。ことしは、よほど時候がおくれてゐるとみへて、乘鞍はまだまつ白だ。その白さがあかるくかゞやいてみへたのはほんの一ト時で、すぐつめたい色にかはつたのは、野をつゝんでしまつたたそがれが、やがて、山にも幕をひかうといふのだらう。

ゆふべ東京をたつて、けさ早く松本へつきすぐ淺間へ來て、一ト風呂あびて、みんなと話てゐるうちに、吉例の雨がふつて來た。どうも、私の旅に雨はつきものだ。ふ

られて困るには違ひないが、つきものときまつてしまふと、雨のないのが、却てものさびしい位のものかも知れない。私は一たい雨がすきだ。雨のすきな人間には、雨の餘りないといふ事が苦痛であるやうに、雨にふられるといふ事は、すこしも苦痛でないばかりでなく、却てたのしみにもなる。一年半も滿洲にすんでゐるうち、いやなこともいろ〳〵と數おほくあつたが、雨のすくないのが、なかんづくいやだつた。日本は幸福で、かへりさへすればいつでも雨がたのしめる。だが併し、此頃は一たいに氣候が變になつたとでもいふのか、さみだれ時といふのに、あまりさみだれらしい雨もなく、また私共小供の時分、ほかの土地のことはしらない、夏といふと、東京にはよく夕立のあつたものだが、この頃はどういふものだか、心持のいゝ夕だちにもあまり出あはない。さみだれ時の、一種特別のあの雨の味は勿論いゝものだが、夕立の心持といつたらまた格別だ、そのどつちにもめぐまれない此頃の氣候は、人の事は知らないい、私にはなんだかやたらにかんしやくを起させる。

私は旅行がすきだ、そうして雨がすきだ、だからすきな旅行にすきな雨がふるといふことは、私にとつて大へん都合のいゝことだ。みんなと話をしながら、私は、淺間の湯の宿の、庭の青葉にふりそゝぐ雨を、なつかしむ眼でみた。あすは山だ。山だといふ感じは、落ついた中に、なんとなくかう森嚴な感じをもつてゐるが、雨といふゆかしい情緒は、この感じをやはらかくほぐしてくれる。今日ふつておけば、あすは大丈夫だらうといふ實用むきな感じもその中にまぢつてゐるが、しかし、今日がもしさば〳〵したようないゝ天氣であつたなら、何やかやと氣がたつて、こんなにしみ〴〵と山を考へるわけにもゆくまい。この雨はいゝ雨だ。私が雨を喜べば、みんなも、それに和して、この雨を喜んだ。

去年、燕をおとづれる時、ありあけから中房までが雨だつた。有明溫泉までのあのうつくしい野、有明山の裾の溪谷、信濃坂から中房までの林、あれが雨でなかつたら、歩行は樂だつたかも知れないが、あの一日が、いつまでも忘れえない一日には或はな

らなかつたかも知れない。それにしても今度の旅行が、どれだけ雨にめぐまれるか、大きな山の大きな雨には、いろ〳〵な危險があるが、そうひどくない程度でなら雨はほしい。雨はまつたくいゝ。白馬の下りが、すばらしい豪雨であつたことが、中房の雨をわすれえないように、やはり白馬に對する印象を濃厚にしてゐる。

そのうちに雨はやんだ。やむと風が出た。風が出ると、山の雲が急にうごきだした。すぐ顔をだしたのが、だれにもおなじみの常念だ、「サーッと雲が拂れると、あの鋭峰が、水色の空にくつきりと切りこまれた。不規則なピラミット型の一高峰。立派な山だ。だが私は、正直なところあまり此山がすきではない、もとより惡からうわけはないが、なんだか情味にとぼしい山だ。

そのうちに、いろ〳〵な山が顔をだして來た、どれもどれも、雪の線がみなあざやかだ。よほど雪が深いとみへる。みんなはビールをのんでゐた、ビールをのみながら、八千尺から一萬尺にわたる高い山の雪を賞し、その連峰の壯觀をたたへるといふ事は

たしかに愉快なことである。膳の上には、信州とはおもへない新しい魚がならべてあるが、私は、むしろガラスの器にうづ高くもられたさくらんぼうの色をめで、その味をめでて、つめたいビールのコップをあげつゝ、山をみる。

席に侍するのは、多く信州の人である、信州の人でない迄も、今、松本の住人である。この人々の間に山が問題になつた、常念の左りが大天井(だいてんぜう)か、右が大天井かといふ問題である。田中君は、左りが大天井であるといふ。西澤君は、右が大天井であるといふ。みるとなるほど、常念をまんなかにしてどちらにも大天井らしい山がある。はぢめは、田中君の説に贊するものが多かつた、が、西澤君は頑として説をまげない。西澤君は、山岳會の幹事とかである、義理にもその説はまげられないものと見へる、しばらく、右だ左りだといつてゐたが、やがて西澤君の勝になつた。

私は、信州で生れ、信州でそだつた人の中で、大天井といふような大きな山が、常念の右か左りかといふ樣なことが、問題になるのを不思議におもつた。大きな山には

大きな山としての特色が十二分にある、その山か、その山でないかは、一眼みたらすぐ分ることだ。それがどうして問題になる。つまり、平生、山といふものに氣をとめてみてゐないのだ。日本一の山の國である信州の人が、山を顧みないことのはなはだしいのに驚く。丁度、大和に立派な藝術があるがそれが大和の人と沒交渉のように、駿河に富士山があるが、それが駿河の人と無關係のように、信州に山は澤山ありながら、山はあまり信州人に關係をもたない、これは、信州の人の不幸である。

朝晩山をみてゐても、それが、その人々の心に響かないといふのはよほど不思議だ。私共、年に一度くるだけでも、信越信飛國境の山々といふものは、響きすぎるほどのひゞきを心に與へるのに、春夏秋冬、四季さまゞの山を、朝に、晝に、晩に、あきるほどみてゐながら、その變化に心をうたれないといふ事はめづらしいことだ。山をみたいとおもふ人がある。見たいとも何ともおもはない人がある。みたいとおもふ人は、はるゞ來て、たまにみて、それで何かをえて、喜んでかへるが、みたいとも何

ともおもはない人は、しゞふ見てゐても、喜ぶことを知らない。山をもつてゐる信州人は、手近に山をもたない私共からみれば大へん幸福な樣だ、が、しかし、折角もつてゐながら、喜ぶことを知らなければ、却てこれは大へんな不幸だ。

信州人よ、山をみることを習ひなさい。みることをよく習つて、みることに馴れゝば、みたゞけで山の大きさや、山の深み、そういふ山の感じといふものが、だん〳〵わかつてくる。山といふものは、何も、金剛杖をついて、草鞋をはいて、のぼらなければ分らないといふものではない。みようがよければ、見ただけでも山は十分わかる。それを、見てゐるだけで滿足せずに、のぼるといふのは、一つや二つの山でなくいろ〳〵な山を、もつとこまかに見たいからだ。大きさの幾とほりをも、深みのいくとほりをも見たいためだ。だがかういふと、山を、ほんとによく見るといふ人間は、實はあまりたんとはないのだ。信州人は安心していい。山のわからないのは、信州人ばかりではないのだ、あつぱれ登山家と自負してゐるものゝ中に、山の分らない人間はか

へつて澤山ゐる。山のみち案内や、高山植物などのことは事こまかに知つてゐながらさて山といふものはどんなものだとなると、殆んどなんにも分つてゐない手合ひが、でも一かど通らしく、よく山の話などしてゐるものだ。

だがお立會ひ、オッと信州人、安心しただけで、それでおしまひにしてはいけない。なるほどとわかつたら、一つ、精だして山をみなさい、みるべく山は、信州ではまことに適當な位置にある。私はかつて、奈良の藝術のことを書いた中に、「遠望」といふことをいつた。遠望といふことは大切なことだ。遠望といふことは、遠見がきくといふことだけではない。遠くに、みるものがあるといふだけではない。遠望といふことは、遠くにものがみへるといふことによつて、そのものと自分とを、結びつけることである。自分とそのものとを結びつけるといふことは、そのものと自分との一致である。ものをえて、心が、明白に、具體的に、そこにまで運ばれる。えたそのものが、素敵なものであれは、心は恐しいハヅミをつけてそこまでゆく。ぼんやり、心は無限

なものだとおもひ、かうやつてゐても、この心は、北極のはてまでへも通うんだと考へるのは、事實その通りに違ひないのだけれども、今、しつかりした對象を、遠くに見いだし、完全に心がそこまで及ぶのをみると、その時の心が、まつたく空想といふことを否定してしまつて、いかに喜びを事實に感じてゐるかゞ分る。山は、想像したゞけでもいゝには違ひないが、實際にそのすがたを雲際にみたときに、想像といふ事のたよりなさがよくわかるのである。

きのふ(八月一日)のあつさは九十七度五分といふ四十年來の暑さだつたそうである。なるほど暑かつたがしかし、けさ新聞をみるまでは、それほどの暑さともおもはなかつた。山のことを書きはぢめて書いてゐると、山の涼意は、筆の上にも通うのであらうか。

私は、長篇「なら」の中に、遠望について、かういふことを書いた。

×

遠望。

私共の世界に、遠望といふことがある、遠望といふことは、一人の人間を、たゞちに、實際的に、その、遠く見へるものまでもつてゆく事である、その遠望のものと、人との間のものとを、すぐ、人間の中にとりこんでしまふことである。

遠望のできる人間はしあはせだ。

むかしの江戸人は、西に富士をみ、北に筑波をみた、富士と筑波とのあひだに、そつくり武藏野がはさまる。

×

すぐ遠望のできるのは山である、山をもつてゐ人間はしあはせだ。

野は、野に立つて野を遠望することができない、滿洲、蒙古の人間のふしあはせは、山をみることができないことである。

遠望して、一番いゝものは山である。

山は、山といふ遠望されるものゝ存在によつて、さらにいろ〳〵な遠望を發生せしめる。

山にのぼつて、川を遠望せよ。

山にのぼつて、みちを遠望せよ。

山にのぼつて、野を遠望せよ。

山にのぼつて、山を遠望せよ。

遠望するに足りる山がないといふことは、すべての遠望をないものにする。

×

だが、遠望のすべてが、みな同じようなねうちで、一樣にいゝといふのではない、だから、江戸からみへる山々は澤山ありながら、たゞ一トロに、「西に富士、北に

筑波」といふのだ。

そうしてまた、野に、必ずしも遠望がないといふのではない、半みちや一里の遠望はきく野もあらう、だがしかしそれは、私のいふ遠望にはならない、特に遠望といふのは、必ずハッキリした對象を要するのである。

雄大な山の雄大な遠望。

信州伊那からみた甲斐駒、かういふ遠望は、そうざらにあるものではない。

自然でさへそうだ、まして人間のつくつたもので、遠望にたへうるものが、この世界にいくらあるだらう。

ほとんどない。

×

あゝ大和、大和は私に、すばらしい遠望を與へる。

遠望の塔影。

俗惡をきはめた都會大阪から、奈良へ走る俗惡をきはめた大軌電車の窓から、藥師寺の塔がみへる。

右の窓から、藥師寺の、塔がみへる。

左の窓から、大佛殿の、高いいらかがみへる。

天武天皇と聖武天皇とが、たがひに顔をみあはして、立つてゐらつしやる。

白鳳時代と、天平時代とが、たがひに白日にその美をかゞやかして、微笑しあつてゐる。

二つの時代、二つの大きな人格、千百年の歴史、それを表現する美い藝術、そのすべてをあつめて、それが、明治大正の私に、グッとくる。

遠望の大和、それは、山よりも大きく、山よりも美い人をみることである。

×

大佛殿の下にたつて、あの高い棟をあふぎみても、大佛殿はたしかに大きい。
藥師寺の東塔のほとりに立つて、あの塔をみあげただけでも、あの塔はほんとに美しい。
そうしてその時の感じは、自分の身や心が、大佛殿のように高くなつたり、大きくなつたり、藥師寺の塔のように美くなつたり、そうして、音樂の旋律のように、自分がゆら〳〵と大空にひろがつてゆくのを感じ、また大きないらかや、美い塔が自分の身や心の中に、ちゞこまつてはいつてくるような感じであるが、
遠望した時は、
塔も、いらかも、たゞ、ハタと私の心をうつ。
藥師寺の東塔の相輪、その水煙、それは、この世における、何といふ恐しい存在

であらう。
いかにあの相輪の比例が、塔の美を完成するべく、恐るべき力と信仰とをもつてつくられたとはいへ、こんなにまでも私の心をうつといふことは、人間業とはおもへない、
人間を絶したるみごとな表現、美といふことは、こんなにも恐しいことか。

私は、信州の人に、遠望を教へたい、そうして遠望することをすゝめたい。他國の人がもちえない遠望の幸福を、信州の人は、多すぎるほどもつてゐる、遠望に手數がかゝらない、よろしく信州の人は山をみることを習ふべきである。
だが、みることに馴れないと、いつまでたつてもみることがつまらない。はやくみることに馴れようとおもふなら、山にむかつてよびかけるのである。山の名をよぶのである。そうすると、今までぼんやりしてゐたものが、急にハッキリする。「あゝ大天

井、ォー大天井」なんでもいゝ、空にむかつて、聲高く、その山の名をよんでみるのだ。空中にむかつて、九字をきつて、咒文を唱へるのは、妖術をつかふ人間の專賣とかぎつたわけではない、遠慮はいらないから山にむかつてよびかける、

「オー大天井よ、槍よ、穂高よ、つばくろよ、

かうよばれると、山は、きつと返事をする。返事をするにちがひなからうとおもふのは、その時、よばれたその山々が、特別な感じでながめられるからで、よびかけるといふことによつて、人と自然とが顔を見合はす、尤も特によびかけるといふ心持でなくつても、人は、いつかしら、何かに、よびかけてはゐるものだ。濃霧の中から、槍の尖端がチラと出る、「あ、槍だ」これは説明ではない、よびかけたのだ。だが大ていな場合、人は、このよびかけを自分の心にむかつてしてゐるようにおもふ。人と自然とが融合しないで、人といふ、自然に對立したものが、自然といふ、人に對立したものを、對立的にみた場合、むかふによせる好意を、自分のふところにしまひこんで

しまふ惡い癖が人間にあるところから、すべての感激を、うちひろげずに、たゞ自分の心によびかける。これはまことにさびしい心持である。大きくさつと先方にむかつて呼びかけてしまへば、刹那に、自分といふものがその周圍にひろがつて、よびかけたものにむかつてのびてゆく、この心持は、自分といふ自然であり、自然といふ自分である、よびかけるといふことには、これだけの強さがある、またかういふ便宜がある。

ある時、私のところに青年等がおほぜいあつまつた。私の家は、武藏野の中の一軒家である。南には、いゝ雜木の林が近い、北は、かなりの廣さをもつた畑で、麥が黃ばみ、麥がかりとられたあとには、かぼちやの花が黃ろくさいてゐる、遠景には、武藏野特有の雜木林が、遠く低くつらなり、またあるひは近く、その一むれが浮き出てゐる。夕になつた。夜になつた。くらい中に、ひるみておいた雜木林は、もう肉眼にはしかとみへないながらに、たそがれの中に黑くうき出てゐるのが、却て複雜な感じ

でせまつてくる。私は、青年等のために自然經を說いた。

汝等、自然にむかつてよびかけよ。森をみたらば、森よ、といへ。林をみたらば、林よ、といへ。オー川よ、オー月よ、すべてにむかつてよびかけよ。青年等はいはれたようにした。その中の一人が、自然と思想と生活との一部をまとめて本にした。本にしたといふことは、した人間にとつて、無論うれしいことである、だが、同時にこれは心配なことである。自分には批評がないが、他人には批評がある。自分にはよくつても、他人には、何といはれるかわからぬ。そういふ時に、本ができて十分うれしいとはおもひながらも、何となく心にひけめのあるものだ。

私は、その本を手にすると、すぐ電報をうつてやつた。

「本ガデキテ、嬉イダロウ

すると、すぐ返事が來た。

「ウレシク、羞シク、有リ難イデス

そうして、その翌日、一枚の葉書が來て、電文の意を補足した、それにはかうかいてある。

嬉しかつたり、羞しかつたり、等々、形容されない心持で居ました處、先生から、嬉しいだらうと、大きく呼びかけられたら、急に嬉しくなりました。

よびかけるといふことは、キツカケをつけることである。エイといつて斬りつける、エイは一種のきつかけである。斬るといふ事を成就するのに、エイは必ずなければならない。よびかけると同時に斬る。自然にむかつて呼びかけるのもおなじ呼吸である。よびかけた時に、よびかけられたその自然は、すつと、心の中にはいる。

よびかけるといふ事はまた、物を處理し、事を處理する方法である。事をすます一の形式である、メリハリである、つまり要領である。むらがり立ちむらがりそびへ、はてもなくひろがれる自然の中にゐて、どこから手をつけていゝか分らないような時に、だまつてゐたら、いつまでたつても手のつけられる時はない。よびかけると、そ

れで、よびかけられた一つはすむ。よびかけるといふことは、先方の彈力を利用することである。よびかけられた相手は、よびかけられて動きだしたそのはづみで、その彈力で、すぐよびかけたものに近づいてくる。

信州の人の山の問答が、とう〳〵山をよびかけることにまで話をもつて來た。この話のうちに、山はだん〳〵くらくなつて、今はただ、湯の町のあかりのみがみへる。さくらんぼうも殘りすくなくなつた、ビールの快い醉ひも、この位が適度だらう。

山を訪ふべく信州に來て、山をみながら、山の話をする半日半夜、山といふものは、なぜかうも人をよろこばせ、たのしませるか。

さあ、あすはいよ〳〵山だ、人々はほどよく辭し去る、一浴ののち、私共はねむりにつく。

けふは、風があるので、大へんすゞしい、軒につるしてある仙臺の松笠風鈴が、い、音を響かせてゐる。法隆寺の塔の風鐸をおもふ。（八月二日午前）

翌日は、はやく淺間をたつて、一番電車で大町へゆき、對山館で支度をして、案內人の北澤淸志君をつれて針ノ木にむかつた。一行は、途中まで隨行するといふ松本聯隊の坂西少佐と、東京から隨行の佐村敏郎と、私と、案內者の四人である。

對山館といふ宿は、いかにも山の案內宿らしい感じのい、宿である。折あしく主人の百瀨愼太郎氏は、山へいつてるすだつたが、細君も、弟も、よく親切に世話をしてくれた。人ばかりでなく、家の構造なぞものんびりして、いかにも信州の田舍に來たようだ。家と、家の人々の素朴さとが、よく調和がとれてゐる。仰々しい登山すがたなどせずに、きものに股引きや袢といふ坂西のなりが、この頃の登山客にはめづらしかつたか、御飯の給仕に來た女中が、坂西がちよいとたつた時、「人夫さんですか」ときくので、「そんな事をいふとおこられるぞ、あれは松本聯隊の坂西少佐殿だ」といつたら、女中はすつかり閉口してしまつた、「よし〳〵少佐殿にそういつてやる」とおどかすと、「どうぞいはないで下さい」は正直でい、。

「どうぞお大事に」といふ宿の人たちの言葉に送られて對山館を出ると、いよ〳〵旅の第一日といふ氣分になる。前面にみへる、雪の山を、「あれは何」ときくと、案内人は「餓鬼です」といふ。町を、右に折れ、左りに折れてやがて野へ出る。前方に、頂きに雲をのせた一大岳がみへる、「あれが蓮華です」針ノ木はそのかげになる。あすは、蓮華と針ノ木岳との鞍部によぢのぼるわけである。そこが針ノ木峠。峠、私は峠といふものに特別の興味をもつ、この峠の高さ八千三百八十五尺、私が今まで越へた峠の中には、こんなに高い峠はない、恐らく日本で峠と名のつくものに、こんなに高いのはあまり多くはあるまい。私は今、一番高い峠にのぼる。私共は、ゆくものである、進むものである、また上るものである。人生の隘路、人生の嶮路、それをふみわけて、まつしぐらに理想の國へとすゝみゆき、のぼりゆく。針ノ木峠の高さは、私に何を與へるだらう。また、四十年前、チエンバーレンをして、嶮難惡絶といはせた針ノ木越への嶮は、何の象徴として私にせまるだらう。私は、尾根を縱走すること、それとは勿論ちがふ興味、また一つの高い山をのぼつて下るといふのともちがつた興味を、この、峠といふ一字に感じて、針ノ木越へといふものが、なんとなくたやすくない感じでせまつてくるようにおもふ、このたやすくないは、この場合、みちの困難といふよりも、意味における困難である。

だが、今度の山は、針ノ木だけでしまふのではない、はぢめの豫定はかうである、針ノ木から五色を經て立山にのぼり、淨土山、雄山、別山、劍岳と縱走し、祖母谷（ばだに）へ出て、大黑、八方で山を下りる、といふ順序である。

計畫として、かなり大きな計畫である。つまり、私の希望は、なるべく早く日本アルプス（主として北）のすべてをみてしまひたい。そうしてあとは、毎年々々、一つところに長くゐて、山のこまかいところまですつかりみたい。山の細部は、こまかいといつても、かなり偉大な人間の大きさよりもずつと大きいものである。私は出來るだけはやく一わたり山といふ山をみてしまつて、はやく、その細部に浸透する樣な態度

で山に接し、私の事業的構成、思想的構成、表現的構成に、山といふものをとりいれたい。山の形と味と、要するに山のすべてを、私のすべてににぢみださせたい、だから山をはやくみてしまひたい。

この感じをいだいて私は、もう十數年を經過してゐる。それでゐながら、去年まで、一度も日本アルプスを訪ふことができなかつた。何かしら支障があつたし、また支障がなくつても、そういふ計畫をたてさせえないほど、いろいろな事情があつた。去年やうやく、白馬と、燕から槍への縱走を果して、年來の宿志が漸く實現しかゝつた。去年以後、夏のアルプス入りは、完全に、私の行事の一つとなつた、三四年の間に私は、北アルプスの全部をみてしまはなければならない。だからいそぐ。

それにしては、今度の旅行にはチト用意が足りなかつた。今からおもふと、やはり山に馴れないものゝ悲さは、去年の縱走のたやすさから、山といふものをあんまり手輕く考へすぎた。防寒の支度なぞまるでなかつた。時期が少々早かつたので、どの小屋もまだ設備がとゝのはないために、食料品や寢具にもだいぶの不便を感じた。いろ〳〵な經驗が、來年の山のぼりに周到な注意を與へてくれる。來年は一つうまくやらう。

大町を出て、山にかゝるまでのみちは、あまり興味のあるみちではない。高瀨入りを左りにみながら、鹿島川をわたり、橋の上に一ぷくして山をみわたすと、祖父岳（ぢいがたけ）、鹿島槍など、みな雄偉な相貌を雲表にゐがいてゐる。この縱走に最終の山である八方（はつぽう）は、ゆるく長い傾斜をみせて、なか〳〵雪があつい。まぢかに見へる蓮華をあすこして、九日といふ日を山の中に送つて、そうしてあすこのあの八方へ出てくるのかとおもふと、旅行の終局がまざ〳〵と見へるようで、愉快であるが、しかし、非常に多くの山を越へるといふことに、いろ〳〵なものゝ僭在を感ずる時、不安に似たものが、すつと心をかすめて通る。蓮華の頂きを深くつつんでゐるのは、あれは雨雲ではないか、けふはあまりさはやかな日ではない。

もうこゝで、人家がないといふところから暫くの間、無趣味な林をとほる、雑木林だがかなり荒れてゐる。「つまらない林だなア」といふと、北澤君は、「こゝらは私有林だからつまらないが、國有林になるとよくなります」といふ。だが、ゆけどもゆけども私有林だ、が、ふとほとゝぎすの聲をきゝつけて、すくはれたような心持になる。ほとゝぎすの聲が、どうしてかう私を喜ばせるのかわからないが、どこにゐてゞも、ほとゝぎすの聲をきくと、すつと私は、よみがへつたような心持になる。それに、ほとゝぎすには、いろ〳〵こみいつた私の回想がある。どんなに遠くでないても、どんなにかすかに鳴いても、すぐ聞へる。聞へると私は、必ず、「ア、ほとゝぎすだ」といつて、どこでもすぐ立ちどまる。

今も、すぐ立ちどまつて、

「ア、ほとゝぎすだ、

そうして、佐村に、

「そら、ほととぎすが鳴いてゐる、

が、その時は、もう聲はしなかつた。佐村はそういはれて、耳をたてゝきかうとしたが、もうきこへなかつた。私は、自然の中で、花は勿論すきだ、花の中では、さくらの花が一番すきだ、しかし、新緑の色は、花よりも却て強く私の心をうつ。私は、新緑の時分が、時候としても一番すきだ、そうして、新緑の林をあるいては、ぢつとしてゐられないような心持になる。私はいつもかういふ、「若葉は新緑の色だ、新茶は新緑の味だ、そうして、ほとゝぎすは新緑の聲だ」、そうして、新茶をあびるほど飲み、林をあるいては、ほととぎすをきゝたいとおもふ。だが、東京の近所では、ほととぎすはきかれない。去年、中房の溫泉で、濃霧につゝまれた夜の谷にほとゝぎすをきゝ、槍澤を下つて、上高知へのみちに、路傍の白樺のかげにつかれをやすめてゐると、その梢から、するどくも美いほとゝぎすの聲がきこへると共に、パッと飛びたつた時、ほとゝぎすの聲を、はじめてこんなに近くきいて、その美さにおどろくと共に、なん

ともいはれない滿足と、容易に二度とはきけないとおもふ殘り惜しさとに、梢をあふぎみながらしばし恍惚とした。

こゝは平凡な林だ、せめてほとゝぎすよ鳴いてくれ、たんとないてくれ、だが、希望通りたんと鳴いてはくれなかつた。林を出はずれると、かやの生ひしげつてゐる野になつた。野には、あやめが澤山さいてゐる。なんといふあやめか、せいのあまり高くない、花もあまり大きくない、そうして、その、大きくないことが大層よく感ぜられる。色の、なんともいへずやさしい、いかにも高雅な感じのあやめが、群落といふほどではなく、青い野のところ〴〵に、まだ若くやはらかいかやの中に、この紫は、なんといふ美さだらう。テントがあれば、私はこゝに野營がしたい、紫の花の中にねてみたい。私は色の中で、紫ほど私の心をとらへる色はないとおもふほど、紫の色を戀ふ。私は、「潮來(いたこ)」といふ唄の調子がすきだ、詞もわるくはない、「潮來出島のまこもの中に、あやめさくとはしほらしや」これは紫である。これを三味せんにのせて唄ふ時、あの唄に、いみじくも紫の調子が出る。紫といふものはしつこくなくつて、そうして、十二分の色氣をもつたものである。高雅な色氣、文明といふものはどうかかうありたい。今の文明は紫色ではない。赤レン瓦の赤色、鼠色のペンキの鼠色。さりとは江戸は、なんといふ多くの紫色をもつてゐたらう。

信濃の國、大町の在を、山深くわけいり、籠川の流れる音を遠くきゝながら、紫の色をしみ〴〵となつかしむ旅人の心には、やはり紫の調子が出る。その紫に、この草原の靜かさがくはゝる時、さびしさにまぢる花やかさ、花やかさにみなぎるさびしさ、それはこのあやめが、人に知られずこの山中にさく心であらうか、だが花は、人に見られると、見られないとにかゝはらず、不斷の落つきと美さとをみせて、天にむかつてその心を捧げてゐる、地に抽んでゝ、祕められたるそのやさしさをのべてゐる。

人に、功業を思ふといふ心のあることは、人としてのつとめの上になければならぬことではあるが、しかし、一たびおもひを、この草むらの中の、紫の花にそゝぐ時、

なぜ人も、かうして靜に咲いてゐられないだらうとなげかれる。おのれの利福のためには、骨肉を讒誣してはぢないあはれな人間の心を、この花が知つたなら、花は、かうしてこゝに植へられて、つひに人間になりえなかつたことを、少しもくやまずに、僅かな一莖の花の中に天地の祕奥をやどして、天に對しても、地に對しても、すこしもはづることのない存在をどんなに喜ぶだらう。この野に何かうつくしい名があらうかとおもつて、北澤君にきくと、北澤君はこともなげに、「萱場」と一ト言いつたがすぐかや場の說明をする。この邊の村々の人々に、このあやめは、何の必要もないのである。ここにはたゞ、かやがありさへすればいゝのである。

山の小屋へ物資をはこぶのに、こゝまでは馬力がくる、あとはかついであがるのだといふので、ある草むらに、荷が澤山圍つてあつた。小屋を經營するのも、なか〳〵容易なことではない、この小屋があるばかりに、山のぼりも樂にできる、小屋をよく發達させるといふことは、山にとつてはよほど大切なことである。小屋がなければ格別、あるとすればその小屋は、いろ〳〵な意味で、山にふさはしい小屋でありたい。

あやめヶ原といはふか、紫野といはふか、それともまたあやめ野とでもいはふか、このむらさきのゆかしい野をすぎて、間もなく川のほとりに出た。籠川入りをのぼりのぼつて遠く籠川にそふてあるいてゐたのではあるが、川に出あつたのはこゝがはじめてだ。私共はこゝで川原に下りて、晝食をつかつた。さつきからあやしくなつてゐた空は、その頃からボツリ〳〵とやりだした。あかるい雨は陽氣だが、くらい雨はさびしい。旅愁にしては早すぎるが、ちよいとそれに似た氣分が、この晝餐をさびしいものにした。さむい川風が、雨をふくんで、つめたく、シャツ一枚のはだにせまる。激流を前にして、でも、煙草に火をつけると、マニラ煙草のにほいが、しめつた風にたゞよつて、ほのかにかほる。佐村がくんでくれた川の水は、ばかにつめたい。

長い休憩の後、一行は、雨の支度をして出發した。こゝらは無論國有林だらうが、國有林になつても、大しておもしろいところはなかつた。白馬などのおもむきなどと

はよほどちがつて、この澤は、どこもみなふところがせまい。美い、いゝ林などあまりない。せまい谷間を、ばかにしめつた樹立の中や、草のおひしげつた小みちや、そういふところへわけ入つて、トボ〳〵とあゆむすがたは、芭蕉の旅にでもありそうなさびしさをもつてゐる。白澤の川をわたつてからも、みちはやはりおなじようにつゞく。今になつてみると、どうゆうものか、このみちの印象が、すこぶる漠然としてゐる、めづらしく、周圍に眼がそゝがれなかつたのである。實は私は、ある一つの事を考へてゐたのである。それはすこぶるわづらわしい考へであつた。人間、なにゝでもなやみはある、別して事業をするものには、いろいろな惱みがある。事業の本筋のことでなく、何やかやと生起するわづらはしさに、經綸をもつ者の心は、それに勝ちうる力をもてばもつほど、よけい考へるのである。一時、その心からのがれたいとおもひ、山へゆけばのがれられるとおもひ、山に來たが、やはりその考へはつきまとつてゐる。難路にでもさしかゝればとおもつて、難路をのぞんだが、みちはあまり樂すぎ

る。心を奪はれる景もなく、みちが樂ならば、考へはやはり一つ處におちつく。おろかな人間のしたおろかな事が、私の心をさで、こんなにもわづらはすといふ事は、そろばんにあはない事である。

ある大岩壁の下のくぼみに、四五人の强力がたき火をしてゐた、あやめの野にあつた荷物をとりにゆく人たちだそうだ、北澤君はそこへはいりこんだ。私たちにもは入れといつたが、はいる氣はしない、私たちはさきへ出かけた。そうしてそのうちに、私たちは、いつか離ればなれになつてしまつた。私は別に急ぐつもりもなかつたが、どういふわけか一人になつてしまつた。時々まつても、坂西も佐村も、なか〳〵來ないので、しまひには、足にまかせてズン〳〵あるいた。どうやら雨は本ぶりになつて來た。いつか私は、自分の過去や、現在のことを、ごつちやにして考へてゐた。とりとめのない回想は、いろ〳〵なことを私におもひうかばせたが、どれもみな、あまり樂なものではなかつた。そうして結局は、けさからの考へにをちていつた。

私は、人間のつくウソといふ事についてしみ〴〵考へてゐた。人間の弱さ、といふ事についてもしみ〴〵考へてゐた。私は、一人の、ウソをつく弱い人間を、よくしてやらうとおもつて、どれほど苦んだ事であらう。いふ事の、どれ一つも信ずることの出來ない人間のいふことを、幾度も幾度もほんとにしてどれほどきいてやつたことだらう。だが當人も、よくならうとおもひ、よくしてくれるものは私の外にないといひながら、それでも平氣でウソをついた。ウソのために幾たび私をウラ切つたか知れない。だがその人間は、惡い人間ではない、たゞ弱さの爲めにウソをつく。人に、よくおもはれてゐたいといふ心の爲めに、だれをもいつはり、私をもいつはる。結局それは自分自身をいつはる事であるのを知らずに、敎へられては泣いて悔いながら、ウソをいふ事はやはりやまない。節持がないのである。私はこれが、どれだけ人間としての情けないことか知れないといふことを、長い時間にわたつて敎へさとして來たのであるが、ほとんどそれは、何の効もなかつたのである。

わるいくせがついてしまつてゐる人間を敎導するといふことは、結局不可能の事かも知れない。人間をよくするには、やはり改造するより外に仕方がないようだ。改造ができなければ新らしくつくるのだ。ながい傳統と習慣でわるくなつたものを、僅かな時間でなをそうとすることは無理である。こゝに私の政治の主張がある。社會としては、人間を改造するのだ。國家としては、國民を改造するのだ。そう思ひながら、私は、山へ來てまでこんな事を考へてゐる自分を、つく〴〵見まはした。檜ノ木がさをかぶつて、糸立てをしよつてゐる登山者の私が、山の事を考へずに山の中で、たゞこの人事におもひなやんでゐる。山には不似合なことのようである。だがこれが私の生活だ。私が山へゆくのは、山を、私の生活にしたいからである。山の味ひを、あらゆる人の生活の中に入れたいからである。山の大きさや美さをしみ〴〵味ひうる人間にはウソはつけない、間に合せなぞはけつしていへない、ごまかしの生活は山にはない、あきつぽさもない、山は、人にもてあそばれるものではない、正しいおのれの存

在をつげることが出來ず、けがすまゝにけがされる生活は、山の生活でない、すゝんでけがれんとする生活はなをさら山の生活ではない、さきの事も考へず、人間の本當の事も考へず、たゞ一時の欲望に、身をあやまり心をあやまるのは山の生活ではない。どうかして、人間の世界からいつはりをとりたい、私はさびしい山みちに、雨にうたれながら、しみ〴〵と、この、人生の痛苦を、おもいやつた。一つの澤に出た、こゝは扇澤だ、こゝで坂西等をまつてやらう。細くつめたい雨は音もなく頰をうつ、私は丸木橋のたもとの石に腰かけて、たばこをすつた。糸立てを、雨がすべる。流れははげしい、岩に激してしぶきのとぶ時、サッと冷氣が肌にせまる。

十分ばかりまつてゐると、坂西等がやつて來た、

「いよ〳〵本ぶりだな

「そうですな、しかし、この雨はよろしうございますな

と坂西がいふ。坂西はよほどこの雨を享樂してゐるのである、無骨な軍人の坂西が、

この、詩趣ある雨の讃美は、この、あれさびた山間の雨にふさはしい。旅行といへば必ず雨で、雨男とまでいはれた私が、坂西から雨の御利益をきかされるといふのもおもしろいことである。人生、雨において悟道すれば、その人は眞に語るに足りる。可哀相に、支那やシベリアの人間は、幾百年生きても、雨によつて悟道するのみちをしらない。恐らくは日本にのみめぐまれたこの雨は、自然における、これは詩である。

雨は詩である。天地の秘奥は、雨といふ詩で、人間の地上にそゝがれる、そゝぐまでの空間を、雨は、みごとな線で充たす、雨の線、この線に拮抗しうる線が、人間と、自然の世界を通じて。雨のほかにいくつあるだらう、たんとはあるまい、もしあるとすれば、それは日本の女の髪がもつてゐる線ぐらいなものかも知れない。

雨ほど、單調でゐて、それで變化に富んでゐるものはない。一つの直線がそのまゝで無量無邊の變化をもつてゐる直線をしめすといふことは、たゞ雨のみがしめしうる世界である。日本は雨の國である。雨の國といつても、それはただ雨がおほいからと

いふわけではない、雨を喜びうる國だからである、いろ〳〵な雨があるからである、雨のそゝぐものに、いろ〳〵なものがあるからである。雨もたゞ、草のない野にそゝぎ、木のない山にそゝぐならば、その變化は非常に限局されて、そこに格別興味あるすがたもおこらないが、日本のように、草のおほい野、木の多い山、傾斜のおほい土地、凹凸のおほい土地、雨としても、これらにそゝぐことは、非常にたのしい事であらう。それをみることのできる人間の幸福は、日本人にめぐまれてゐる。（八月二日）

今日は風がありすぎた、ありすぎるとすこし困る。つまりかはいた土地に、風はふさはしくない。雲が出て雷が鳴つたが、雨がパラ〳〵と二三滴をそゝいだまゝでやんだ。雨の事を書きながら、雨をれがつたが。（八月二日）

雨をたのしむ、樂むのがしかし、いつも愉快で、いつものんきなものではない。かういふ、人のめつたに來ない、深い、深い、山の中にはいつて、一行四人がみな離ればなれになつて、せまく、くらい感じの谷間を、雨にぬれながら歩く心持は、さすがに

それが愉快だとはいへないのである。たゞしかしこのさびしさを、東京にゐて、どうして味ふことができよう。東京の雨に、どんなに寂しさをもつた雨があらうとも、この、心をさすばかりの、くひこむようなさびしさの感じはない。家をおもひ、東京をおもふ。旅衣の袖はとうにぬれて、檜ノ木笠からは、雨の雫がぽた〳〵と垂れる。脚もとにころがるこの石ころは、この石ころが世に出てから、幾たび人の足にかゝつたらう、恐らく數へるほどしか人に觸れたことはなからうとおもはれるほど、この山間には、人といふ氣分がかけてゐる、たゞ僅に一人の旅人を、さながら人の總代表でもあるように考へながら、ふまれてゐるだらうとおもふ石には、たゞ一塊の石でありながら、この全山のさびしさが、こつてこの堅い塊りになつたかとおもはれるものがある。その石がぬれてゐる。雨の中にある石のぬれてゐるのに不思議はなかりそうなものだが、ホット息をついて雨中に佇む旅人の眼には、この石のぬれてゐるのがさびしさを堪へ忍ぶ表示のようにもおもはれる。

扇澤で一緒になつた佐村と坂西とは、またいつかあとになつてしまつた、北澤君に至つてはかげもみへない。扇澤を越へてからはみちも大分山らしくなつた、のぼり下りも頻繁になつた、やがて一里もあるいたらうか、どうやら大澤の小屋もちかくなつた。めづらしくも一人の登山者の下りてくるのに出あつた、そこはちよつとした坂の上だつた。前面に、みねはみへないが、中腹に大きな雲溪をもつた山がつらなつてゐる。客は手に、美い山ざくらの花をもつてゐた、その花の手で、雪溪の一つをゆびさしながら、「あすこの方までいつてきました」といつた。

雨の中に、ほのかに吐息する樣な、山ざくらの一枝が、紫のあやめについで、今までのうちで、一番たのしいみものであつた。さびしい谷間に、このうつくしい花がさいてゐる。私はあやうい丸木橋をわたりながら、はやく峠にいつて、あのさくらの咲きみだれてゐるのをみたいものだとおもつた。

七月花

信濃なる針ノ木峠雪消へて今しも咲ける山ざくらかな

やがて大きな白樺の下に、小屋をみいだした。山をあるいて小屋につく喜びは、通常の旅行者にはちよいと分らない味である。扉をあけてはいると、もう五六人の先客がゐた、爐を圍んで、榾火のもへあがるのをみながらたのしげに話てゐる姿は、この頃では、恐らく山小屋だけにみられるすがただらう、自分もその仲間にはいりこみ、ぬれたものをかはかしながら、まづタバコを出す。

小屋についたのはまだ早かつた、五時少し前だつたらう。夕食前に、私は、佐村を つれて、小屋の近所を散歩した。雨はもうすつかりやんでゐた。小屋にゐるうちに、祖父ヶ岳の方に青空がみへだして、みんなは、あすの天氣を祝しあつたが、そとへ出てみると、雲のきれめには、ところ〴〵あざやかな青空が出て、雲の走ると共に、その青空がだんだんひろがつてゆく。このあんばいでゆくとあすは大丈夫だ。谷間や野をあるく時には雨もいゝが、山の頂上でふられてはかたなしだ。ふられなくつても、

霧があつたら、遠望は少しもきかない、「お山は晴天」とこなければ、登山のかひはまつたくない。どうぞ天氣のいゝように、これは山へのぼる人間の、だれしもが、判コでおしたような願ひである。

雨あがりの谷間がきれいに感ぜられた。白樺の新綠といふものは、わざとらしいとおもふまでにあざやかだ、どすぐろい葉の喬木の一帶の中に、白樺のこのあざやかな新綠の一帶がいくつもいくつも縞のようになつて、蓮華と針ノ木の谷間に、高山らしい夏の氣分をみなぎらせてゐる。私は、崖を下りて、雪溪の上に立つた、そうして下をみおろした、山が、左右からせばまつて、幾重にも幾重にもかさなつて、谷を、非常な錯雜した感じにおいてゐる。一つが、右から流れる樣に下つてゐれば、その先の一つは、左から、すつと手を垂れた樣にさがつてゐる。かさなりかさなつてしかもそれが順序よく、それでゐながら機械的でなく、自然がゆるす範圍での不自然さといひたいような感じで、この一つの谷を構成してゐる。こんな一つの谷なぞ、天地の中の

一小部分にすぎないのに、その一小部分のうちの一つの山の流れ、あるひは山の尾といふようなものでさへ、筆にし、口にするのに、かなり骨の折れるほどな立派さをもつてゐるといふ事は、人が自然に對した場合に、いつでも感じるひけ目であり、困難であり、時として勿論當惑である。

一つの谷をはさんで、山と山とがやつてゐるこの演技は、あまりに妙をきはめてゐるので、時として、みてゐるに堪へないような感じにさへうたれる。谷についていふ場合、谷といふほとんどすべての谷が、みなこれである。自然の構成といふものは、どうして、こんなにまで絶對的なのであらう。人間が、これはいけない、とはいひえないものばかりである。けふもまたこの谷へ來て、私は、いふべき言葉を知らないのに、耻ぢて、そうして私は、たゞ谷をみる。

「佐村、いゝ谷だなア、なんともいへないなア、どうだい、あの、谷の、かうせまつてゐるあんばいは

たゞそれだけの事しかいへない。尤も、いふのは、たゞこれだけでいゝのかも知れない。いふといふ必要よりは、味ふといふことの必要の方が、一人の人については、重要な問題に屬するだらうから。人は、自然の美さを、人にいふ爲めにみるのではあるまい、自分が、味ひえれば、さしあたりまづそれでいゝわけのものである。たゞ、どこまで味ひうるかといふことが問題だ。そうして、その問題が解決されゝば、自然に、人に語ることができるようになるに違ひない。自然に對して、人はいつも餓へてゐる狀態である。餓へてゐるといへないまでも、けつして飽滿してはゐない、だから自然にぶつかれば、丁度、すき腹にうまいものをたべたようなあんばいで、概括的にうまいとはいつても、ほんとにうまい味が分らないとおなじものだらうとおもふ。人に味をきかれても、とにかくうまいといふ程度とおなじほどに、實にいゝ、といつて、それを、その自然の讃美の言葉のすべてにするより外仕方がない。

自然を語るまへに、やはり自然をよくみなければいけない。チッとみつめる事が、自然をみるものゝ第一の仕事でなければならない。みるといふことは、やさしいようでゐて、實はなか〳〵むづかしいことだ。一度や二度みたゞけでは、どんなものでも仲々ほんとうにみへるものではない。まして大きな自然は、非常に複雜な組織と形と感じとをもつてゐる。端的にみて、端的に評價することはできない。ほめるのも、へたにほめると、却てその自然をだいなしにする。

祖父ケ岳の尖頭が、夕の空につきいる樣にそびへてゐる、谷はまだ暮れるといふではないが、靜に、夕の色を、雪の上に浮べてゐる。うつくしいのは、白樺の新綠である。東京を幾十里も離れた信州の片田舍の、大町を、また六里もはなれた深山に、すべての狀況は、旅の人をして、深山といふ感じのおごそかさに沈默せしめるのに、この白樺は、何といふ若々しさを梢にみせて喜んでゐるのだらう。花々しいこの新綠。どんな都會の、どんなにかゞやかしい空氣の中にもちだしても、そのすべてを壓倒してしまひそうなこの新鮮さは、さながらにこの大きな自然の、奇麗な血の動きをみる

樣である。山も、また、栂だか樅だかなんだか知らないが、黒ずんだ喬木等も、ちつとおしだまつてゐる樣な中に、この白樺だけは、花やかにうたつてゐる。いはゞ山中のモダンガール。だがこれは、いや味でない、氣ざでない、浮氣でない、この白樺の唄には、岐阜提灯のほのかなかげで大學生とあひびきしながら「さまの名をよびやよぶ名につれて」などいふ淫蕩な感じはない。ながい間、深い雪にうづめられてゐた白樺は、雪がとけてしまふと、雪におされて、みな弓なりになつてゐる幹から、ながい苦闘にうちかつたよろこびの聲を、その枝頭にどよめかせる。寒氣にとぢられても、雪にうづめられても、屈せずたゆまなかつた白樺に、歡喜の時がめぐまれた。今しもその若葉は、大空にむかつて、心ゆくばかりのび、かゞやきわたる日の光りに、その節操をほこらんとするのである。

たまさかに空を仰げるうれしさかこの白樺はほゝえみてあり

私は、パイプをくはへながら、雪の上をあるきまはつた。雪溪の上は靜だ。佐村と

私との外にだれもゐない。人間の世のわづらはしさからすべてのがれて、かうして、雪溪の上に立つてゐると、果してこれが現實の世界なのだらうかといふ考へが、時としてうかぶ。そうおもふ下から、すぐわづらはしい考への群りおこるのに、わづらはしさといふものゝ果てもないのに、われ知らずさびしい氣分にもなる。だが、美い自然の中に身をおきながらも、そういふ人事の煩はしさを脱却しえないのが人かとおもふ時に、人としての悲哀を感ずると共に、そういふわづらはしさが、かういふ自然の中にきて解決されてこそ、自然と人との交渉は一層濃くなるのではなからうかとおもふ。そうおもひながら、いくら自然の美さをみながらも、味ひながらも、その煩しさがすこしも解決されないのに、心の切なさをおぼへる。

物おもへとて、谷は、かうも靜なのであらうか。苦め、そこにおのづからなる解決があると、この山々はいはんとするのであらうか。今にこの雪はとける、お前の立つてゐるところも、やがて、とけて、くづれて、一筋の谷川になる、お前の心の結ぼれ

をとけよ、谷は、そのさゝやきを私にさゝやかんとするのであらうか。私は、パイプをかへて、また紫の烟りを谷風になびかせながら、こゝろよくきしむ雪を、駒下駄にふみしめながら、空をあふぎ、谷をみおろし、かさなりあふ谷をながめながら、それにしても、なぜ、小屋の旅人等は、この靜かな夕を、小屋にこもつてゐるのだらうとおもつた。夕飯までには、まだかなりの時間もあるのに、この谷の夕べをみないといふ事は惜しいことではないか。たとひこの谷がいゝ谷でないにしろ、山をたづねるものが、このいゝ夕べを、山に好意の眼をおくりながらそゞろあるき位はしたくならうではないか。山へのぼる人の態度が、たゞ山へのぼりさへすればいゝ、たゞ山をあるきさへすればいゝ、といふ樣なのが、私には非常にさびしく感ぜられる。

山へのぼるといふことは、結局、大きな山をみるといふことにあるのだ。みて、驚き、喜ぶために山にのぼるのだ。冒險とか、探險とか、そんなことは、山に對しては、きはめて小さな感情、いはゞたゞ人間の物ずきを語るにすぎないのだ。この頃流行の

岩のぼり、そんなことは、山をみるについてのいゝ地點を訪ふために、よぎなく岩をのぼらなければならないといふ時に、はじめて意義をみいだすことであつて、はぢめから、岩をのぼることだけが仕事のやうな岩のぼりは、むしろ山を冒瀆するものである。槍の北鎌尾根は、穗高以上の難場だといひあつてたゞそのいひあふことをよろこぶことのごときは、あやまり解せられたる登山の興味である。

そういふ登山家が、はやく小屋へつきながら、たゞ爐ばたの漫談で、むなしく時を消し、この美しい谷の夕を知らずにすごす。もつとも、こんな谷ぐらゐ、こゝでみなくつたつて、これから先きにまだいくつもあるといふかも知れない。こんなところで見なくつてもといふかも知れない。だが山は、そういふ美さをいくつもあつめて、こゝに大きな美さの大きな山ができてゐる。ただ一つの山のたゞ一部分に、このゆたかな自然があり、そのゆたかなる自然のあつまりが、一つの山を構成するといふ事こそ自然の妙作用なのである。この故にこそ自然は、こんなに大きな山をつくるのである。

たゞ一つか二つを見て、それで滿足していゝなら、自然は、こんな大きな山をつくる必要はない。美の大群落、それでこそ山は、くめどもつきぬ美の深さをたゝへてゐるのである。

小屋へかへると、今、晩餐がはじまつたばかりのところだ。大きな鍋に、あつい味噌汁と、あついカレーとが、うまそうにできてゐる。ふだんなら、けつしてうまくはたべまいとおもはれるような味噌汁が、山では、必ずうまくたべられる。尤も、山でたべたらなんでもうまからうと人はおもふだらうが、山では、持ちはこびに便利なものだから、どこへいつても鑵詰だが、鑵詰といふものは、どんなにひもじい時にたべても、けつしてうまいとおもふものではない。こればかりはまつたく不思議だが、それとおなじ不思議は、必ずまた味噌汁のうまいことで、だれもこれは二三杯、中には四五はいとやるのもある。

食事がすむと、間もなく大ていみな蓐にもぐりこんでしまつた。まだあかるいし、蓐の中で手紙でも書かうと、私ももぐりこんだがなんだかねるには惜しいような氣がする。みると爐ばたがすいてゐるので、私は、その一隅に座をしめて、靜に煙草をすつた。山で煙草がなくなると困るとおもつて、三百本もつて來た。私は、煙草をふかすとなると、十本位つづけてふかすことがある。吸引するのではなく、たゞ吹かすにすぎないのだが、どうしてもやめられずに、ずうと連續してふかしてゆく時、何ともいはれない執着を感じる。こんな時私はだまつてゐる。だまつてたゞ、煙草にひたつてゐる。私は、一本の煙草を、ごくゆつくり吹かす、けつしてスバ〳〵とはすはない、すふかすはないかといふような自然な情態で、煙を口にみちびき、その煙りが、ゆるく唇邊に停迷し、四散して、かすかに消へてゆくのをみるでもなくみないでもなく、たゞ感じてゐるうちに、何かゞ私の中にできる樣な氣がする。そうして一本をすひ終ると、すぐかはりに火をつけ、それをまた前とおなじように吹かす、三百本の煙草がかうしていつなくなるか、どうか山にゐる間だけはなくならせたくない。なくなる時に

この靜かな氣分のどこかゞくづれる。今もこの、爐ばたの、ランプの下で、靜かに榾火をみながら煙草をふかしてゐる、この靜けさも、一つは煙草が十分にあるといふ安心から來てゐる。山の夜を、小屋の中で、靜に煙草をふかしたい。

爐ばたには三四人の人がゐる、その中の一人は松本のリリー寫眞館といふ寫眞屋の主人。一人はこの小屋の主人で、また對山館の主人である百瀨愼太郎氏。いやしくも日本アルプスの名を知る人で、百瀨愼太郎といふ名を知らぬ人はあまりあるまい。その百瀨氏の小屋で、百瀨氏と山の話をするのは、山をたづねるものにとつては、たしかに愉快なことである、そうして、穩雅な性格の持主である百瀨氏の、柔かな口調としづかな話振りは、山の小屋の夜るといふものを懷しむに適當なものである。

いつからか百瀨愼太郎といふ名を知つてから、どういふわけともなく、百瀨氏をかなり年輩な人だと思つてゐた。けさ對山館をおとづれて、帳場に、白髮の老人をみたとき、これが百瀨愼太郎といふ人かとおもつた。ところが、いよ〳〵たつといふ時、まだ若い細君が、「主人は小屋の方に參つて居りますから、小屋でお目にかゝりましたら、何か山のお話でも致すでございませう」といつたので、白髮の主人のほかに、まだそういふ主人があるのかとおもつたが、來てみれば、この若い主人が百瀨愼太郎氏なのであつた。

この若主人は、おもつたより若い、そうして、いかにも近代人らしい風采をしてゐる。山に明るい人ときいて、恐らく山男のような恰好をしてゐるだらうとおもつた人は、おもひもよらぬ文化人である。山について無智に語るのでなく、よく山を解して、靜に物語るところは、きくものに、對するものに、心地よい感じを與へる。

普通にみる、山について語る人が、ほとんど山の事實について語るだけで、その感じえたところのものを語つてくれないのは遺憾である。哲學者で山にのぼつたものもあるだらう。思想家で、山にのぼつたものもあるだらう。文學者で、詩人で、山にのぼつたものもあるだらう。だが私共は、哲學者のみた山といふものを、私共の前に示

されたことを知らない。文士、詩人によつて、山の祕奥が、よく描寫され、うたはれたといふことを知らない。尤もこれは自分の寡聞のせいかも知れない、寡聞の爲とあれば幸である、しかし存外寡聞で知らないのではないかも知れない。今からもう十數年前、山にあこがれきつてゐながら、山にのぼれなかつた時分、仕方なく山の本を買いあつめてよんだ。小嶋烏水の「日本山水論」「日本アルプス」河東碧梧桐の「日本の山水」など今でも名をおぼへてゐる。烏水の「日本山水論」にはさすがにいゝところがあるとおもつて、筑波山の紫色を論じたところなど、今でもおぼろげに記憶があるが、碧梧桐の「日本の山水」にいたつては、いかにもつまらなかつたので、そのつまらない事だけを強く印象しただけで、山についてつひに何物をも感じえなかつた。碧梧桐の俳人としてのねうちは、私の知らないところである、たゞその俳諧は、あるいた山記錄された山の上には少しも及んでゐないようである。もし、碧梧桐の俳句にして、この、山の記行のごときものであるならば、それは實につまらないものだとおもふ、山の美も、大きさも、この記行には、何等の咏歎となつてゐない。

山にのぼるすべての人が、かういふ程度の印象をしかのこしえいものだとすると、山にのぼるといふことは、結局大して効能のあることではなさそうである。ねがはくは、山に對して、躍りくるつてゐるような熱烈な心持の表出をみたい。山に對して、立派に對抗しうるような人間が、屹然として山以上にたつて、山のすべてをみ下ろしてゐるような高い心持の表出をみたい。谷の深み、山の高さ、空の大きさ、それに應じえられる人間の獨白をきゝたい。

だが、百瀨氏の話はまことに面白かつた、そうして、百瀨氏によつて語られた事實は、たしかに、山といふものをおもはせ、考へさせ、興味をおこさせるに十分な話であつた。とりわけ、山の人喜作が死ぬ前後の話がおもしろかつた。主人の話から考へると、喜作は、獵師の中の英雄であつたらしい。北アルプスとしては南方の住人である彼れが、クラシシを追ひ、熊を追つて、針ノ木一帶の北方へ迄侵入してくると、そ

の邊の獵師はほとんどみな壓倒されてしまつたそうである。喜作が、六七頭を仕止めてゐる時、ほかの獵師は、漸く一二頭をうるにすぎなかつたそうである。そうして、一たん追ふとなると、夜晝の區別なく、どこまでもと追ひこむ、それは實に非凡なものであつたそうだ。そうしてある時、祖父ヶ岳の雪中に夜營した。

一行は、喜作と、喜作のせがれと、ヤザウとシャウキチといふ、(この二人は北方のものである)四人であつた。なだれをおそれたので、一行は、夜營地について十分の詮攷をしたのち、雪をほつた、そうして雪室をつくり、屋根をふいて其中にねた。ところが、夜中に雪崩れが來た。そのなだれにおしつぶされて、喜作親子は、聲もたてえずに死んでしまつた。シャウキチは、半身を雪にうづめられて身動きができず、ヤザウ一人は僅にのがれて、深山の夜の雪中をかけ下りて、急を大町に報じた。すぐ救援隊が組織されて、遭難地にむかひ、シャウキチは幸にたすけられたが喜作親子はとうとう助からなかつた。悲壯な死である。悲壯な死であるが、しかし、獵師としては、死場所を得たものであり、またいゝ死に方をしたのであらう。ことにすぐれた獵師として信越國境の一高峰祖父ヶ岳の夜の雪中に、そのむくろを横たへるなど、その環境の雄大さと、その事柄の傷しさは、古英雄の死に比しても遜色がない。この話は、大へんおもしろかつた、夜の山小屋の爐邊の話として、それはまことに似合はしい話である。一箇の平凡な獵師も、山では英雄である。雪中の山岳を縱横に馳驅して、クラシシを追ひ、熊とたゝかひ、信越のかりうどに其人ありと知られた喜作の生涯を、山の英雄として仰慕しつゝ、その死をいたむ心持は、山といふものにしつくり合つた感じである。

喜作等の生活における山と、私共のみる山とには、その生活の相違などからして、いろ〳〵な違ひがあるだらうとおもふが、ある一面において、たしかに山に如同しえた喜作等の生活は、たしかに山の生活である。喜作はおそらく、山にも心臓のあることを知つてゐたらう、山にも血の流れてゐることを知つてゐたらう、活き物としての

山において、知るべきことのほとんどすべてを、知つてゐたらう、知るといふよりも、感じてゐたらう、クラシシを追ひ、熊を追ふといふことが、獵師としてのなりはひからであるには違ひなからうが、しかし、追ふ時には、なりはひ以上の心がはたらいてゐた事は無論だらう。

一度おひだしたら、夜を日についで追ふ、夜といふ區別もなければ、晝といふ區別もない。たゞ追ふといふことだけがある。これは職業だけの心持ではない、また單なる興味でもない、山といふものゝ感じが、仕事の上にあらはれるのである、山といふ超凡な心持が喜作をしてかうさせずには置かなかつたのである。山の大きさ、單に大きさだけではこの心持はいひつくせない、山の偉らさ、その山の偉らさが、自然と仕事の上にあらはれてその山の感じにかなふべく、喜作の衝働と感激は、彼れをして深山大岳を縱横に馳驅させた。幾時間かの後に死のせまれるも知らずに、悠然として雪中にねむりについた喜作が、雪にうめられて、その儘永遠のねむりにつく。みづから墓穴を堀るといふ事は、いゝ話ではない、しかしながら喜作の死の葬は、喜作自身の手でつくられた、しかも、かゞやける白雪によつて築かれた、うらやましい死に方である。その日は陰曆の幾日だつたらうか、もしも月が、喜作をうめた雪の上に照つたならば、ここにやすらかにねむれる山の英雄の死をとむらうべく、傷ましくもうつくしい光景であつたらう。

主人が喜作の話をする時、小屋番の太郎作さんも、そばに來て、時々あい槌をうつたりまた主人の知らないことを話た。爐ばたがふさがつたので、太郎作さんは、葬の中にもぐりこみながら、すはつて、こゞみこんで、頰杖をついて、主人の話を熱心にきゝつゝ、また語つた。太郎作さんは、シャウキチとヤザウの後の事について話た。私は、今度の旅行のすべてを通じて、この太郎作さん位すきな人をみない。みたばかりでもこの人は、實にいゝ人であるように思へた。きはめて愛嬌のある、素朴な、樂天的な顏は、山の人としてはづかしくない。私は喜作の性格に山がはいつてゐるなら

ば、この太郎作さんの性格にも、たしかに山の一面がはいつてゐるとおもふ。この人の顔のどこにも、近代的浮薄のかげがない、この人を、山が生みだした人間の一人としても、けつして山から苦情は出まいとおもふ。喜作の死に對する、ヤザウやシャウキチのヤリ方のまづかつた事についての太郎作さんの叙述は、人をきずつけずに、その人の欠陥を語つてゐる。

リリー寫眞館主の話も、山の話ではないがこれも爐邊の話としてわるくはなかつた。おもしろい話のうちに、山の夜は、靜にふけていつた、突然、ポンと音がして、爐にかゝつてゐた藥罐の底がはねた。話に無中になつて、湯のなくなるのに氣がつかなかつたのだ。藥罐を機會に話は終つた。私は、旅裝の儘で蓐にはいつた。蓐にはいれば、こんどくるものは明日である。明日はどんな事がまつてるか。今日のみちがあまりに樂だつたので、あすのみちの嶮難惡絶が一層感じられるだらうと思ふ、併し、山のみちはどうせ惡い、嶮難と知りつゝ、わざ〳〵こゝへくるのだ、どんなみちであるかが

たゞたのしまれるのだ、苦しければ苦しいで、それが樂みであるのだ。

今までとまつた山小屋の中で、この大澤の小屋が一番いゝ感じだつた。白馬の小屋は感心しなかつた。燕の小屋はいゝ小屋ではあるが、同室の人との間に、今夜ほどはとけない感情がぎごちなかつた。西岳の小屋は靜でよかつたが、少しさむかつた。針ノ木越への大澤の小屋で、はじめて山の小屋らしい落つきと、親しみを感じることができた、尤も、とまりてのすくなかつたのも一つの原因だらうが、それよりも大きな原因は、對山館の主人にあつたこと勿論だ。この人の、すこしも營業的くさ味のない經營ぶりは、山の第一日における第一の好印象であつた。

感じのいゝ小屋で、たゞ一つ感心しないのは、この小屋の便所だつた。便所は、雪溪にのぞんだ崖の急傾斜を利用して、かたばかりのものができてゐた。前に塀のあつたのが、雪の爲にこはれてしまつて、小屋はやつと二三日前にあけたばかりなので、塀まではまだ手がまはりかねた。それはいゝ、たゞ困るのは便所の構造である。尾籠

な話であるが、用をたす時、私共は、雪溪にむかつて、下半身を全部露出しなければならない。人に見られるおそれはないといふかも知れない、私は、山にみられることを、人にみられるよりも恐れるのである。この醜態はどこまでも隱したいのである、隱せるだけを隱したいのである。美しい雪溪にむかつて、みにくい下半身を露出したくないのである。私は、山を美いものとおもふ、それに對した人間は、かなり美くないようであることをはづかしくおもふ。どうせ美くない人間だからとて、その尤も醜い部分をむきだしにしてさらすといふことは情ないとであるとおもふ。我々男はでもまだいゝ、女性で、よくこれを使用しうる人はおそらくあるまい。登山家は、登山道德として、山を汚すなといふ。尤もなことである。山を汚すより以上のみにくさを、人間をして演ぜしめることを止めようではないか。その一つとして小屋における便所の設備だけは完全なものにしようではないか。

私は去年槍を訪ふて、その殺生小屋に晝餐をとつた。あすこは、小屋の前に便所が

ある。その便所には圍ひはあるが、しかしそれは、女性の安んじて用ひあたはない狀態にある。そうしてあの臭氣はどうだ。いかにこれが一萬尺の高處であるとおもつても、その高さと偉大さとはあれでは味ふべくもない。それも無理のないことで、一夜に七八十人の人をとめて、そうして、その結果としての殘物が積集されて、折角の山をだいなしにするのだ。そのすぐそばにはまた、罐づめのたべ殘しが、そのまゝ捨てられて、それが山と積まれてある。一萬尺の高山だといふに、その山にあつまるあのおびたゞしい蠅はどうだ。この小屋をあづかるものはただ番人である、その番人が、對山館主人のように山をおもひ、山を愛する人であれば文句はないが、さもないと困る、折角の槍も、あの小屋でだいなしだ。

だがあれを、あの小屋の人たちで、どうすることができると人はいふだらう。話はそこだ。私はそれについて、山に關するいろ〳〵な團體のいろ〳〵な方面における活動を希望したいのである。私は、日本に、どんな山の團體が、いくつあるかすこしも知

らない。しかし、かなりあるようにおもふ、けれどもそれには、聯絡もなければ、統一は無論ないようにおもふ。大體、それらの團體の多くは、たゞ興味的な登山團體といふにすぎないようにもおもふ。興味的な登山も結構だが、その興味が、いろ〳〵な弊害を起すとしたら、そういふ團體は、かりにも山の會としての名をもつてる以上、なんとか山の爲めにはかる位なことは考へてもらひたい。

山岳に關するいろ〳〵な團體は、協力して山のよごれることを防止すべきである。無論その防止には施設について入費がいる、山について必要な豫算、もし山の團體がこれを負擔しえないならば、府縣へでも、政府へでも、然るべく談合するのである。そうして、山について一定の方針をたてる、小屋の經營もする、だが小屋にはそれぞれ歴史がある、從つてすべての小屋の經營をとまではいくまい。しかし、小屋主の經營法に對して、その不備を注意し警告するなどいふ事は、その會の事業の重要なる一つでなければならない。山の小屋についていつも感ずるのは、汚物殘物の處置の、どこでも當をえてゐないことである。登山者に、山をけがすなと注意しながら、山小屋が、山を汚してゐるのは矛盾である。

本來、日本アルプスのような山を保護することは、國家の重要な仕事の一つでなければならぬ。政府が、ゆきとゞいた神經のもちぬしであるならば、この日本の山水における最中樞を、一營林署の管轄にまかしておくべき筈のものではない。この山々は、説明をもちひずして、日本のうつくしさを語るものである。ヨーロッパにあるアルプスが、どんなにうつくしいものかは知らぬ、しかし、日本の、信飛信越國境にある山々は、大においては或はゆづるも、美においてけつして遜色あるものではあるまい。氷河に削られた奇峰といふようなものが自然の大觀として、遠望するわれらに、どれだけ奇峭の感を與へるものかはやはり知らないが、日本に殘つてゐるといふ氷河の遺跡について、正直なところ私は、それほど特別の偉觀を感じてゐない。私は、山に對する私の心持がどんなに進んでいつても、恐らくヨーロッパのアルプスを見なければ、

日本のでは物足りないとはおもふまい。私は、日本のアルプスで滿足するのだ。これは日本の山であつて、他のどの國の山でもない。私は日本の山には、日本の特色があるだらうとおもふ。世界の人が、人としての共通性をもつと共に、國民としての特殊性をもつように、山も、山としての世界的共通性をもつと共に、國土の相貌における特殊性が必ずあるものとおもふ。そうしてみた時に、この、日本を代表する山々、すなはち中央大山系と稱せられる日本山岳の中樞部の山々は、山としての日本を語るものである。私は、政府が、政府の事業として、この山々を保護することに力をつくすのが當然だらうとおもふ。

私は、山の小屋の夜話に、リリー寫眞館の主人に、なぜ、山の寫眞家が協力して、日本アルプスの綜合的大寫眞帖をつくらうとしないのかといつたが、山の寫眞について熱心な主人にも、この綜合的な考へ方はうけいれられなかつた。私は、日本の風景といふものを考へるときいつもそうおもふ。日本の政府が、たしかな神經のもちぬし

で、活潑な、要領をえた神經が、新らしい魚のようにピチ〳〵としてゐるならば、國土の形狀といふものについて、その地形圖を、一陸地測量部といふような、小さな豫算しかもたない、小さな機關に托しておかず、內閣直屬の機關としてでも、大規模に地形圖を完成する事業を考へるだらうとおもひ、同時にまた、國土の相好を圖版に示すものとして、山水の美景をあつめて國民に與へ、また世界に寄與すべきだらうとおもふ。だがだめだ、政府にそんな氣のきいた人間はない。營林署が、山のところ〴〵に掲示板をたてゝ、「雷鳥をつかまへてはならぬ、高山植物をとつてはならぬ」これが政府の、山に對する精一ぱいの仕事だもの。

政府がだめなら、では山岳會でと、山岳會に血のめぐりのいゝ人がゐたら考へるのだらうが、血のめぐりがいゝかわるいかは分らないとして、この山岳會連は、山登りについて、今までのところ、ロクな案內記一冊さへ提供してはゐないのだ。毎年々々、山が開けると共に、その年の事の大體を記した報告、案內記、などあつたらよからう

とおもふが、そんなものさへつくつてくれてはゐないのだ。年鑑ばやりの世の中だ、山岳年鑑でもこしらへたらどうだ。年鑑では、ことしの役にはたゝないといふなら「大正……年山岳案内」でもなんでもいゝ、ほんとに山の小屋や、その他山に關する一切の事項と關係をもつた、責任ある案内記をこしらへるぐらゐなことは考へてもらひたい。（信濃山岳會が案内の小冊子をだすが、不十分だ）

山小屋への希望が、いろ〳〵なことになつた。なにしろ、山に對する人々の態度が、あまり立派でない、專門的になりすぎたり、興味本意であつたり、とかく山の眞髓にはふれないからだ。山を味ふことが、すこしも問題にされてゐない。これはなぜ山にのぼるかゞ、實はよく分つてゐないからではなからうか、永年山の案内をしてゐる人たちも、なぜこんなに人が山へのぼるかについては、すこしも知らない。（八月三日）

今日の地震はかなり大きかつた、大正十三年の一月十五日已來の地震だらうとおもふ。丁度其時朝日グラフをみてゐたが、危險と感じたら座をたゝふとおもひながら、靜にゆれるのを觀じた。（八月三日）

大澤小屋の夜があけた。坂西は夜中に、だいぶ蚤にくるしめられたそうだが、私は幸にぐつすりねこんだ。朝食がすんで、それぞれ人々は出てゆく、私共はゆつくりして一番最後になつた。私の山あるきの希望としては、朝はゆつくりたつて、夜ははやくとまるとである。追はれるような調子で、いそがしくあるくことはどうも感心しない。去年、燕から槍へいつた時、燕の小屋から、西岳の小屋までが一日の行程だつた、この位の行程が一番いゝ。山に親しみをふかめるには、みちをいそいではだめだ、同時に小屋ではゆつくりしなければならない。

小屋の前で坂西と一しよに記念の撮影をして、百瀬氏にわかれをつげ、一夜のとまりをみかへりがちに林の中を二丁ばかりもあるくと、すぐ雪溪に出た、いはゆる針ノ木大雪溪だ。私共はこゝでカンジキをつけて、サクサクと雪をふんでのぼつた。私は去年、白馬の大雪溪で、かなりなやんだ記憶をもつてゐる。七八人の一行で、私が一番おくれた。雪溪の上ではどういふわけだか知らないが、なんだか脚がすゝまなかつ

た。しぜん今度の針ノ木の雪渓にも、多少の危惧をもつてゐた。だが、實際にあるいてみると、その危惧はすつかりとれてしまつた。歩行はすこしも苦くなかつた。そうして、去年とは反對に、雪渓のうつくしさを感じることができた。

正直なところ、去年の白馬の雪渓にはすこしも感心しなかつた。想像してゐた雪渓と、實際の雪渓とは、あんまり違ひすぎてゐた。想像では、雪渓といふものはうつくしいものだつた、が、事實の雪渓といふものは、遠望の時は別だが、近よつてみると、非常にきたないものだつた。きたない雪渓にはすつかり失望した。きたない雪渓は、みてつまらないことといふばかりもなかつたが、同時に、のぼるのにもいやだつた。雪のきたないのは、土によごれてゐるのである。山から吹きおろされる土砂が、雪の上一面をうすぎたなくしてしまつて、ウツカリ手でもふれようものなら、セメントのような、灰のような、きたない土が指についた。その時そうおもつた、白馬の大雪渓、白馬の大雪渓と、人はやかましくいふが、これは雪渓が大きいといふ事實だけを、いふのであつて、そうして人はそれに滿足するのであつて、大きいといふ雪渓の感じが雄大でなからうと、またその大きな雪渓がきれいでなからうと、そんな事には頓着しないのだ、そうとすると大雪渓なぞ、實につまらないものだ、と。

だから、針ノ木を越へるについても、雪渓にはそう大した期待はもつてゐなかつた。たゞアルプス踏破には、これがつきもので、厄介なみちだ位におもつてゐた。ところがこの大雪渓は、白馬の大雪渓とは、だいぶおもむきをことにしてゐた、白馬にくらべると、大變きれいだつた、このきれいさが、雪渓といふものを、極めて新鮮な感じにしてみせた。

白馬の雪渓は、雪渓といふよりは、雪の凹路とでもいひたい感じである。雪渓がもつきはだつた味ひが、白馬にはとぼしい、むしろたるんだ感じが、白馬の大雪渓の特長をなしてゐるようにおもふ。それが、雪渓としての尨大さを示すのではあらうが、しかし、雪渓といふべくあまり氣のきいた感じではない。雪渓は、そのぜんたいの調

子が、急であるところに、雪渓としての妙味がある。

針ノ木の雪渓は、この意味において、尤もいゝ雪渓の一つなのではなからうか。雪渓の巾はかなり廣いが、ひろすぎはしない。傾斜は、ゆるいところも勿論あるが、ゆるすぎるといふ勾配がほとんどない。ところ〴〵にある棚のような平も、ごく僅だ。そういふ條件があつまつて、キリッとした、氣の利いた雪渓が出來てゐる、そうしてかなりな延長をもつてゐる。私は、この雪渓が、かなり氣にいつた。

それに眺望がいゝ、一歩々々と雪渓をよぢながら、忘れずにふりかへつてみると、下の谷々は、ふりかへつてみるたびにもう形をかへてゐる。前面の祖父ヶ岳はのぼればのぼるほどいよ〳〵高くなつてくる。はじめ遠くに、はるか上に、柱のようにつつ立つた大岩石の、天を摩するかとおもはれたのが、みる〳〵はるか下になつて、その上に、今まで見へなかつた、岩小屋澤山一帶の連峰がみへてゐる。針ノ木の連峰は、針ノ木の二千八百メートル以上につゞいて、スバリ、赤澤、鳴澤、岩小屋澤などの山

々、みないづれも二千六百メートル以上の高さをもつて祖父ヶ岳につらなつてゐるのが頗る壯觀である。その壯觀が、雪渓をのぼるにつれて、みごとに展開される。私は、二三十間あるくと、ふりかへつては、この快望をながめた。「坂西、ごらん」といつては、眼にみへてかはつてくる、甚しい變化の大景を坂西にさししめした。

坂西は、山へのぼるのが、これがはぢめてである、「山はどうだ」と私にきかれて、「こんなにいゝものとはおもひませんでした」と、正直なことを告白する、すつかり感心してしまつた。私は、やすむ時は勿論だが、あるく時も、坂西の爲めに山を語つた。佐村もはじめてゞある、佐村は、ひとりで、何かを考へ、何かをみながち、あとからのぼつてくる。

いつか私は、人と離れて、先へすゝんでゐた。去年、白馬で、どうしてあんなに雪渓に困つたらうと、それが不思議におもはれるほど、私はズン〳〵のぼつていつた。登攀に、なんの困難もなかつた。一時間も歩いたらうとおもふ時分から、雪渓はなか

〳〵急になつて來た。急になつてくると共に、私は、ます〳〵坂西等と離れてしまつた。はぢめ、まつすぐに見へる高いところがたぶん峠だらうとおもつたが、北澤君にきくと、それは峠ではなかつた、峠はずつと左になつてゐるそうだ、それだのにその、峠でもないところが、おつかぶさるように高く屹立してゐる、ずいぶん急だ。

高くなるにしたがつてまた、この雪溪は、非常に大きくなつて來た。一たいことしは時候がおくれてゐる。このあたりなどは一月もおくれてゐるそうで、そのせいだらう雪が多い、その雪のおほいのには、案内人もおどろいてゐた。とうにとけてしまつてゐる筈の所が、まるでとけてゐない。だから、非常に大きくみへるこの雪溪も、眞夏にみたら、存外こんな大きな雪溪ではないかもしれない。時候がおくれたのと、私共の登山がはやかつた爲めに、この雄大な雪溪をみることができた。大きいと共に、この雪溪は非常にうつくしい。はげしい風が、いつもこの雪溪の上をおとづれるためだらう、雪溪の上にはほとんどおなじような間隔で、無數の線ができてゐる、その線がふかくほれてゐる、それがみごとな縞模樣になつてゐる、縞になつてゐるこの線の感じは非常に強い、これが、雪溪をば、非常にするどくしてみせる。

總じて、嶮峻な山路を、人はあまり談笑してのぼるものではないが、雪溪の登攀となると、普通の山のぼりとはだいぶ勝手がちがふとみへて、人はなほよけい沈默してしまふようだ。實際、雪溪をのぼるといふことは、たゞの山をのぼるのとはよほどちがふ。今もこの廣い雪溪に、点々として、十二三人のかげはあるのだが、どれもみな營々としてのぼるのだけで、のぼることが、今の自分としての精一ぱいの仕事だとでもいふように、見へる。雪溪は一つの沈默だ、またいくつもの沈默だ。

左りに折れる少し手前あたりから、人々はだん〳〵すみつこのほうへよつてのぼりだした。急な雪溪ののぼりに、いづれも多少の困難を感じて、雪のまつたゞ中をさけて、はいまつの地帶をよぢようとするのだらうが、私はたゞまつすぐにあるいた、雪溪の中央をのぼつた、時々やすんで下をみおろすと、その急なのに驚かされた、

でる時は、おもひ〳〵に小屋を出發した人々も、今は、ひろい事はかなり廣いが、とにかく一ト眼にみわたせる範圍内に、みなそのおの〳〵の足場をかためて、一歩々々とのぼつてゐる。はるか下にゐた坂西は、よほどこののぼりになやみを感じたか、方向をかへて、横のはいまつ帶へとちかづいた。かういふ急な雪溪ののぼりには、人々、なんとなくかう、一種のおそれに似た氣分をもつようだ。雪溪は人にせまる。押されるような感じがする。のぼればのぼるほど尋常でない心持になる。自然と何ものかによりそはふといふ氣になるか、もうすこし樂な足場をといふ氣になるか、坂西ばかりでない、四五人の人は、やはりはいまつにそうて登つてゐる。だが坂西は、たちまちにして、やつとこさでたどりついたはいまつをまたはなれた。どうも雪溪は、雪溪のまつたゞ中をあるくことが一番いゝようだ。私よりよほど先へいつた筈の一人が、やはりこのはいまつで閉口して、のぼりが一向はかどらなかつたと見へて、私と一しよになつた。

もう峠はみへた。はるか上ではあるが、雄大なる雪の祭壇は、天にむかつて、もろ手をひろげた樣にみへる。先登のたれかゞ、雪溪のまん中から、その雪の祭壇の一端にむかつて、斜めに足跡をつけておいてくれた、その足跡をたどつて、私はまもなく峠の上に立つた。矢澤氏の「日本アルプス登山案内」によると、「宿營地（大澤の小屋）の上十數丁の大雪溪を越へ、崩壞せる急坂を登り盡さば、針ノ木峠の頂上に出づべし」とあるが、この、崩壞せる急坂といふものが、私共の行程にはない。その崩壞せる筈の急坂も何もかもがすべてみな、雪溪になつてしまつてゐるのである。事實においては、雪溪をのぼるよりも、崩壞せる急坂をのぼることの方が、あるひは困難かも知れないが、しかし、それだけ雪溪は延長し、しかもその延長が、驚くべき急勾配になつてゐることが感ぜられるとき、此峠の價値がグッと高められるようにおもふ、雪溪としては、無論この方が雄大である、

雪溪をして、雄大を感ぜしめる第一の要件は、「雪の厚味」でなければならぬ。雪の

薄い雪溪、實際はうすくないが、薄く見へる樣な雪溪は、雄大な感じを起させない。雪は、あつければ厚いほど、その雪といふ感じが外部にまでにぢみ出る。雪の空氣。雪の呼吸。つよく表面にあらはれ出るその驚くべき雪の放射。これは、雪が厚くなければ感ぜられない。深い雪は色までちがふ、積つて深くなつたか、吹きよせられて深くなつたか、とにかく深くなるといふことには、何等か特別な力が加はつてゐる。

雪溪をして、雄大を感ぜしめる第二の要件は、その「斜面の構成における斬然たる姿態」である。これは、雪溪といふものの全部を通じて、一ト眼にそれをみることは困難であるけれども、その部分々々においてみられる、必ずこのざんぐりした強い刀法によつてつくられる、簡勁にして雄大な直線、これが、雪溪の雄大な美をきづきあげるについての、尤も重んずべき點である。

雪溪をして、雄大を感ぜしめる第三の要件は、その「全體がある程度まで急勾配」でなければならないことである。勾配の急な雪溪は、その雪溪全體を、一つのものとしてみるのに大へん都合がいゝ。勾配の急なためによく見通せる、その爲めに、感じがとぎれないのである。つまり全體を同時におもひうかべる事ができるからである。その意味からいつて、私共の針ノ木越へは、その大雪溪が、峠の下でなくならずに、上まで及んでゐたといふことが、雪溪の觀賞について、非常に都合のいゝことだつたのである。もしもあの雪溪が、矢澤氏のアルプス案内にある樣に、峠のはるか下できれてゐたとしたら、私共がみたような、雪そのまゝの峠によつて、一層の美をました針ノ木大雪溪といふものはみられなかつたらうとおもふからである。

雪溪とさへいへば、何もかも同じようにおもはれるだらうが、針ノ木の大雪溪が、峠にきづかれた雪の祭壇、また、その形態において雪のバルコニーともいふべき首部をもつてゐなかつたら、私共の感じたような美と雄大とはあらはされなかつたらうとおもふ。大ていの場合、雪溪といふものは、首尾を欠いて、たゞ胴中だけのものが多い。普通の山みちから卒爾に雪溪に入り、また卒爾にわきの山みちに出る。白馬の大

雪溪でもそうである。だから、歩いたのはたしかに大雪溪にはちがひなくつても、ともすれば大雪溪といふ感じが白馬ではまとまりにくかつた。

その不足が、針ノ木の大雪溪で、遺憾なくみたされた。針ノ木大雪溪の首部は、まづ、人をして仰瞻せしむるに足る急傾斜をもつてゐた。この、壯嚴にして人にせまる感じを深酷に味ひながら、嚴肅な心持で、一つ一つと頂上に近づき、遙かに祭壇とみたものが、今は一大雪堤であり、また一大城壁のようにみへる雪の大斷層をからくもよぢて、その雪堤、城壁、斷層の上に立てば、これは正しく天に對する祭壇であり、日本アルプス幾十座の大山巨岳を展望するバルコニーであり、そうしてそれが、實に針ノ木大雪溪の頭部なのである。雪溪は、こゝにはじまり、またこゝに終るのである、このバルコニーに立つて、雪溪を瞰瞰するとき、神斧をもつて削成せられたる美き溪谷は、その急傾斜における斬然たる姿態をもつて、人間のために、雪溪の美と大とを刹那に、瞬間に、しかも不斷に、示すことを感ずる。

雪溪のうつくしさは、私を恍惚とさせる。山には、非常にあらぽついところ、荒つぽすぎるところがあると共に、どうかすると、馬鹿に氣の利いた、すつきりした、いゝ感じのところがある。都會の、ごく繁華な、それでゐてごく瀟洒な感じの町の夜がもつてゐるようなさはやかさを感ぜしめるようなところがある。燕(つばくろ)には、この感じがことにおほいが、針ノ木の雪溪でも、私は、かなりハイカラな、それでゐて非常に高雅な感じに恍惚とした。

雪溪といふものは、どうして非常にハイカラな感じのものだ。日本畫における美しい色や線を多量にとりこんで、その感じとフランス近代の感じとを一しよにした、後期印象派以後のフランスの畫をみる樣に、非常に新鮮で、そうしてハイカラなものだ。いゝにほひの葉卷をふかし、うまい玉露でもすゝつて、このうつくしさを味ひながらほめたいほど、人をして淘醉的な氣分にさせるものだ。私は、白樺の新綠を、高貴なモダンガールといつたが、そういふ言葉をつかつてまでもあらはさなければあらはし

にくいような新鮮さをもつて、ヒタ〳〵と人の感情におしせまつてくる、この、快よさ。汗にまみれたシャツなどぬぎすてたいほど、はづかしさを感ぜしめる、この、自然のおちつきたる花やかさ。非常な深さにやしなはれて來た力が、自然ににぢみだしてくる不斷の新しさ。どんなものでも、これにつゝまれたら、たちまちに同化して、美となり、若さとなり、力となり、よろこびとなり、おどりくるいたいようなこの自由さ。私は、雪のバルコニーに立つて、のぼりくる人をみおろしながら、雪溪の美をほめたゝへた。

雪溪の美を十分にみようとおもふなら、一般の登山者がでかけるよりも、すこし、はやめに山へいかなければなるまい。山における一日の差は、山の形象の上にかなり大きな變化をもつてゐる。私がこれを書いてゐる今は、八月四日の午後五時三十分だが、けふもし針ノ木を越へた人があつたとしても、私が感じえたものを、その人も感じうる樣な針の木の自然であつたかどうかは分らない。勿論かなり違つたものであるだらうとおもふ。もはや、峠の上の雪のバルコニーもないかも知れない。勿論ないだらう。バルコニーがないとすれば、針ノ木大雪溪の感じは、私のみたものとは、グッと違つたものになるだらう。私のみたものと違つたものであるならば、雪溪の美は半減してゐるだらう。だから、ほんとに雪溪のうつくしさを見たいとおもふなら、すこし早くいかなければならない。私が針ノ木大雪溪をこへたのは、七月の六日である。平年よりは一月も時候がおくれてゐるといふ七月の六日が、こゝに叙述したような狀態であつた。とにかくはやいほどよからう。雪がうすくなり、土がその上にかゝり、兩方の山の岩石などが、やたらに落ちてくるようになると、雪溪はだいなしになる、だいなしになつた雪溪にはすこしも好意がもてない。

急な雪溪をのぼる時、私は、まさしく山とむかひあつてるような氣がする、山とにらめつこしてゐるような氣がする。そうして、山としても、そのひそめる美さを人間に語るには、雪溪と、雪溪の周圍の自然とですることが、一番手つ取りばやい方法だ

と、恐らくおもつてゐはしまいか。山は活きてゐる。だから山のどこもかもが、みなその活きた細胞の活潑な運動を感じさせてはゐるが、しかしかならずしもそれらが、すゝんで人間にむかつて、自分から交渉を開始してくるようには見へないが、雪溪ばかりは、人間に對してはなしかけ、いどんでくる樣におもはれる。いきてる山の中では、雪溪といふものが、また、一番よく活きてゐる。

山のいどみ、このいどみに對して、人間は、その心を出來るだけすなほに開くと共に、山に對して、もつと深く、もつと直接に、もつと親しみをもつてせまらなければならない。雪溪をのぼる人で、どれだけその雪溪と雪溪の周圍との、驚くべき諧調に心をそゝぐ人があるか。雪溪について、登山者に好んで語られるのはスキーの話ぐらゐなものではないか、たゞ一種の運動にすぎないスキー、それも結構でないとはいはないが、それ以外において雪溪が語られることのすくないといふことは、雪溪の價値をあまりに小さく局限するものである。

うつくしい青空。あざやかな、淺い、いはば新綠の泡かとおもふような白樺の新綠の、ごく〳〵新鮮な色。くろずんだはいまつ。しかし、そばへゆくと、その葉は、實にいゝつやをもつたはいまつ。赭い茶色の土。山はだ。黑い岩。遠い連峰の雪溪が、白日にかがやく、その美い大模樣。あしもとの雪溪に、風が、あらい櫛のめを入れた樣な、みごとな縞。するどい斜面。雪溪の風采は、五分もすかない、通人、高貴なるハイカラ、オー瀟洒なるその感じ。

さて、バルコニーに立つて見おろしてゐる私の眼には、小さな、小さな、人の影が、一つ、二つ、三つ、四つ、と數へられる。小さな人、その小さな人は、雪溪にかぢりつくようにしてのぼつてくる、はふようにしてのぼつてくる、そうして、ともかくもみんなのぼりついた。のぼつた人の數は、かなり多かつた、私の一行が四人、醫專の學生が二人、寫眞の仲間が五人、農大の學生が三人、そこへ大澤の小屋の人が四人ばかり、針ノ木峠の頂上は、たちまち賑かな光景を呈した。

峠は信越の國境になつてゐる。峠といつても、その前後にみちらしいみちがあるわけではないが、峠そのものは、まさに峠らしい相貌を有してゐる。峠は、蓮華岳と針ノ木岳とをつなぐ最低部である。ほとんどどの峠ももつてゐるだらうとおもふところの、頂上がすりへらされた樣になつてゐる形を、登山者以外ほとんど通行の人もなからうとおもはれる針ノ木峠の頂上も、また有してゐる。

ともかくもこゝは峠だ。これは何の峠だ。もち論山の峠だ。だが、これが、人生の峠でないこともなからう。人生の峠とした時、いまこゝについた、私は、人生の峠をのぼりつめたものなのだらうか、峠にたつ以上、まさに峠をのぼりつめたには違ひないのだが、しかしこれが、人生におけるたゞ一つの峠であつて、それをのぼりつめたといふのではない。人生には幾つもの峠がある、その幾つもある峠のうちの、一つの峠をのぼりつめたのである。私のこの旅の行程をみても分る、けふ、針ノ木峠の頂上にたつた私は、あすはまた、ザラ峠の頂上にたゝなければならない。山は一つの山

ではない、人生も、たゞ一つの山でない、のぼりつめても下れば、また一つの新らしい上りをのぼらなければならない。人生における一つの峠、それはつまりある一つの特殊な地點を示すのである、私はもはや、ある一つの、その、特殊な地點にたちえたのである。

私は、峠といふものについて、かなりな興味をもつてゐる。一時、いろ〳〵な峠をあるいてみたいと考へたことがある。またある時は、富士を、その周圍のいろ〳〵な峠からみたいと思ひ、それを計畫したことがある、不幸まだその希望は果さないが、この希望は、いまだに放棄しない。峠といふものは、なぜか私に大變な興味を感ぜしめる。今度の山行も、はぢめいろいろに考へてみた、一番はぢめの案は、白馬からはぢめて、立山を縱走し、藥師から更に烏帽子を縱走しようといふ大計畫で、脚のあまり達者でない私は、これにほゞ二十日の日を豫定したのだが、此春、朝鮮滿洲を巡遊の途次、朝鮮の知人にあつたところ、その人と、朝鮮の金剛山へのぼることを數年前

約束してあつたのが、ことしはどうやらその約束をはたさなければならなくなつたので、日本アルプスにそう澤山な日數を費すわけにいかなくなつた。そこで第二の案をたてゝ、烏帽子から槍の方へ縱走しようかともおもつたが、去年、白馬からみた立山連峰がいかにも立派だつたのと、針ノ木峠といふ峠が、信州から越中への大だい斷路で、針ノ木峠そのものは、いかにも日本アルプスの大要衝のようにおもはれ、かつ峠の標高八千三百八十五尺といふことが、峠としての非凡さを示してゐるので、この天嶮を越へて、この峠の頂上が、いかに雄大な觀望をもつてゐるかを見たかつた、すなはちこの旅行には、針ノ木峠の、峠といふものが、大層な意義——といふも、仰山だが、をもつてるわけだ。

私は峠に立つた、それは、私としてははじめての峠である。私は、この峠の上から、私の歩いて來たみちを見る。おもへば私は、かなり勇敢にあるいて來た。そのあるいて來たみちには、しつかりした足跡が印せられてある。たゞ何となくケチをつけたがる小さな人間等が、正面から私の企圖に對しては、一言もいひえないくせに、いや、わらじのひもがとけそうだとか、足にまめができてゐようとか、この足跡がまがつてゐるとか、男らしくないかげ口をいつても、そんな事が私の事業にすこしのひゞをも入らせうべきものでない。卑しい人間の卑しい根性と、卑劣な行動に對して、大きな規模をもつ人間は、何もいふ必要がない。私が一つの峠に立ち、二つの峠にたち、こへるだけの峠をみなこえて、目的地についた時、小びとらに、この大きな企てははぢめて分る。たゞ私は、今、非常に困難な立場にゐる、そのため私は一つのみちについて、幾度びもつまづく樣なことがあるかも知れない、幾度びも、脚をとめなければならないようなことがあるかも知れない。私は今、私に對して、私のみちに横はつて、下らない邪魔をする石塊のようなものを、谷底へけとばしてしまふだけの自由をもつてゐない、それだけに仕事がおくれる。しかし、何といつても、私は、たしかに一つの峠に立つた、かへりみれば、私が、この地上にえがいて來た線は、ふとく、たくま

じく、その土に印せられてゐる。

そうしてたつたこの峠は、これが、信越の國境である。右と左と、前と後とで、その所管がまるでかはつてゐる。蓮華と針ノ木の最低部は、その最低部の中央に劃せられる線によつて、これまた、蓮華と針ノ木との所管を明瞭にする、オーこの峠は、なんといふこみいつた峠だらう。

こゝで私共は中食をする。越中の谷から吹きあげる風はさむい、針ノ木岳と蓮華岳の頂上は濃霧に包まれてゐる。峠の感じはあたゝかなものではない、信州の谷で流した汗は、越中の風ですつかりかはくと共に、寒さが肌にせまつて來た。はいまつの枝をとつて來て、焚火をする。材料がしめつてゐるのに、風がつよすぎるので、仲々つかない。荷の中から新聞紙を澤山さがしだして、それをもやして漸くたき火らしくなつた、みんなはそれを圍んで暖をとる。

はじめ、此峠に立つたとき、眺望といふものはほとんどなかつた。かねて針ノ木の眺望は非常にいゝときいて、それを非常なたのしみにしてゐた私は、すつかり失望してしまつた。朝よかつた空模樣は、雪溪のなかばごろから、次第に霧の徂徠をおほくしてゐたのだ。そうして、峠につけば、峠の周圍は、すべて濃霧のつゝむところだつたのだ。（八月四日）

しかし、山といふものは不思議なものである、今の霧が、いつ迄もの霧ではない。中食をすませて、焚火に暖をとりながら、氣永くまつてゐる私共の爲に、霧は、次第にうすれていつた。右の方に、赤牛、黑岳、野口五郎が見へて來た。やがて、烏帽子の雲もとれた、烏帽子は小さく可愛いゝ山である。黑岳や野口五郎が、雄大な體軀を雲間に横へてゐるのに、これは、わづかにくびをのぞかせてその特殊な風貌を親しげにしめしてゐる。

雲は、靜かに、東へむかつて動いてゐる。つばくろがみへた。大天井（だいてんぜう）がみへた。前（まへ）穂高（ほたか）が見へた。北アルプスの精鋭は、次第にその面容をあらはして、その一つがあら

はれるごとに、人々は「オッ燕だ、」「大天井だ」と歡喜の喊聲をあげる。のぼつてゐる時には、のぼつてゐるその一つが、ほとんど全世界でゝもあるような大きさを感ずる山が、ズラリと立ちならんだありさまは、雄大とか、豪壯とかいふ、ありふれた言葉ではとてもいひつくせない。だが、ほかに言葉がない、これを形容して雄大といふよりほかはない。但しこれは、「雄大の群れ」である、雄大を極めたものが、群り競へる雄大さである。その雄大にはみな特色がある。赤牛、野口五郎などの磊塊たる雄大。つばくろの樣に、やさしいが、そのやさしさが天を摩する雄大。殆んど古今の英雄を拉し來つて、その特性をおもふまゝに發揚させ、そうしてそれを、一つ一つの山に仕立てたように、その山々は、燕はついにつばくろである特質と形容を、永遠にむかつてたもち、少しも他にゆづらうとしない氣宇は、まことに、山をきはめるものゝみが、味ひうる境地であると共に、この山々のみがしめしうる大きさである。

三十分ばかりのうちに、霧はすつかりとれて、針ノ木峠から見られる北アルプスのほとんど全部の山が見へるようになつた。尤も、立山の連峰は、丁度針ノ木岳のかげにかくれてみへない。立山をのぞいて、三俣蓮華と黑部五郎の一帶を最遠景として、赤牛、黑岳、野口五郎の中景、これはすべて右手にみへ、槍ケ岳一帶は、丁度正面になるのだが、北アルプスの盟主たる槍ケ岳は、王者としてのその威容を、輕々しく人間に見せるのを惜むのか、まだ雲ふかき中にその全容をおいてゐる。左りには、つばくろ大天井、そうして近く餓鬼があり、右の最近景には、烏帽子と不動がある。

山ぐらゐ、その刹那をたつとぶものはない。こゝには、いつといふきめられた時間がない。雨天でない限り、朝はやくとか、夕方とかには、その神秘を全然公開する僅な時間はあるが、それ以外に、きめられた時間といふものはない、刹那である、瞬間である、その刹那と瞬間とをとらへる爲めの持久が人にない限り、山の眞相はつかめない。この針ノ木峠も、のぼつた時の濃霧に落膽して、中食をすませただけで、さつさと谷へ下りてしまつたら、世に針ノ木峠の頂上ぐらゐつまらないところは、なかつ

たかも知れない。近くの山と谷との霧のゆきゝに、ほの見へる雪溪の誘惑に、つりこまれて、がまんしてゐたら、その山々が、今に出ようといふ忍耐がなかつたら、とてもこの大觀は見られなかつたのだ。

學生たちの二組は谷を下りたが、私共はまだ焚火のそばにゐた。槍の出をまつてるのだ。どうやら槍は出さうだ。東鎌尾根がハッキリ見へて來た。槍の出をまつ私共には、鎗が、雲のどこいらに出るかゞ興味ある問題だつた。高さからいふと、大天井と槍とでは、僅に千尺ぐらゐのちがひしかない。その大天井を標準として考へると、こゝから最遠景にみる槍の穗は、そう高くはなからうとおもはれた。その事を北澤君にいふと、北澤君は、「どうして槍は高いでねエ」といつたが、間もなく、「槍だ」とだれかがいつた時、霧のなかにうつすりとその峻峰をあらはした槍は、なるほど群をぬいてゐた。高い山は、高い山へのぼるほど大きく見へる、千尺の差は、この場合ただ數字の上の千尺の差ではない。その差は日本北アルプスの盟主として、何ものもこれに及ぶものはないといふ差である。なんといつても、槍のすがたをみなければ、日本アルプスは、なりたゝないほどの必要を、槍はもつてゐる。槍のかくれてゐる日本アルプスは、いはゞ鼻のない人のようなものである。

だが槍は、雲をつんざくように聳へた、その鋭峰だけを槍とおもつてしまふと、大へん感じが小さくなる。非常にひろい肩幅。巨人の胸のようなその全體を完全に一望のうちにおさめて、そうしてあの尖端をみなければ、槍の面目は分らない。磊塊として幾峰にも分れた穗高の威容は、その壯嚴と、その豪宕とでむしろ槍を壓するほどにも感ぜられるが、それに對して、神工鬼斧になれる一大城壁の樣な、おそろしく錯綜した大きな屏障の上に立つてゐる槍の尖端は、槍ケ岳山塊の全精氣を、たゞその一點に集注したことにおいて、たしかにアルプスの全體を威壓するの概がある。非常にひろい胸。非常にとがれる尖端。これが、槍ケ岳のリズムであり、また槍ケ岳のハルモニーである。

槍に似た山は、日本アルプスの中に澤山ある。鹿嶋槍も、槍に似てゐる。白馬槍も、槍ににてゐる。あるところからみる杓子も、槍に似てゐる。かりやす峠方面からみる烏帽子も槍ににてゐる。もし尖端だけをもつて、槍の特長とするならば、槍ケ岳は、その高さにおいて非凡とするも、類型の山を澤山もつてゐる點において、あまりめづらしいとはいへないかも知れない。しかも槍が、幾十座の大山巨岳を壓して、中央大山系に君臨するのは、ある人がいつたように、槍は、山といふよりは山脈であるといふその偉大なる廣さをもつて、なをその上に、あの、魏々たる風貌をもつてゐるからである。槍が、この特殊な相好をもたずに、類型の多くの山をもつてゐたら、それは、かなり槍の價値を減殺するのであるが、この特性があつて、しかも類型の山が多く、類型の山はありながら、この特性において全く及ばないことが、槍をしていよ〳〵大ならしめる。

けれども、槍の一つが、そんなにすぐれてゐるからとて、ほかの山が、とびはなれ

てわるいといふのではない。物には觀方がある。一つの觀方で、槍の拔群なところがわかると共に、また一つの觀方で、大天井における驚くべき感じを味ふこともできる。ある意味において、私は、大天井を、日本アルプスにおける屈指の名山とするに躊躇しないのである。かりに、燕や、槍や、その他の山々を、人のつくつたものとしてみた時に、燕が、いかに苦心彫琢されて成つたか、槍をつくる天工は、それこそ彫心鏤骨、非常な刻苦によつて、あの山々が出來たらう。それらの中にあつて、大天井こそは、全く作爲のあとをみない山である。兀としてこゝに、この山が、そのまゝにおかれた。わるくいへばこの山は、巨大な馬鹿男である、なんの能力もなく、ただ大きなづう體を、この天と地の間にボンヤリ横たへてゐる血のめぐりのわるい男である。それほどこの山は單純である。それほどこの山は自然である。人はほとんどこの山をかへりみない、これはたゞ、燕から槍へゆくふみ臺だ位にしかおもつてゐない　だが、このあまりにも豪宕なこの山容はまさに日本アルプス中の最大怪奇ではないか。大天

井といふ名はなんといふおもしろい名だらう。これは天井でもあり、また大きな平らな屋根でもある。あるひはまた天にむかつての、何かの壇である。この山頂に雲のかゝつてゐるのを見る時、天は、この大天井岳によつて、支へられてゐる樣に感ぜられるではないか。これは、天をさゝへる爲めの壇であらうか、あるひはまた天のさゝやきをきく爲めの壇であらうか。

くらみゆく靜かな空に、この大天井が、廣い頂きをクッキリみせて、靜まりかへつてゐるのをみると、この大天井の形が、天に對する尤もすなをな形であるとおもふ。天の何かをうける爲めに、この山は、かういふ特殊な形をしてゐるのかも知れない。原始の世界をおもはせるような、この、豪宕で、素朴をきはめた山容が、この從順さをみすることの不思議さよ、私は心ゆくまでこの山を讃美したい。

針ノ木の上からみても、大天井のかざりのない大きさは、ほとんど槍にもゆづらない威壓をもつてゐる。實際山といふものは、實に無限の感じをもつたものだ。感じう

る心がこちらになくならない限り、山は、機會をつくつていろ〳〵な影を人間に投げる、もし感じうる心が動けば、山は、おもひもよらないすがたを示して、人間を驚かせる、感じうる心がそれにつれていよ〳〵活躍すれば、それにむかつて、山の秘奥はすべてひらかれて、山の生命はおどり狂ひながら、人間の中に入つてその心にみちひろがる。だから山は、不斷にみなければいけない、常住の接觸でなければいけない。私は信州の人をうらやましくおもふ、あゝ、山をみるべくめぐまれたるその國人、私は時として、信州にすみたいとさへおもふ。

蓮華と餓鬼との鞍部が、大きな窓になつてゐる、その窓から、富士の見へることが發見された。富士ばかりではない、左りに八ケ岳もみへる、八ケ岳ばかりではない、右に甲斐駒を先頭とした南アルプスもみへる。富士は、丁度この二つの山のまん中に立つて、王者の威容をみせてゐる。それがいかにもとゝのつたいゝ形だ、だが、あんまり小さく見へて、それに裾の方がぼやけてすこしもみへない富士は、雄大といふ感

じを與へない、むしろかあいゝ感じである、たゞ富士を、日本山岳の王者としてみる心持の上で、なんとなくみんなの眼が、これにそゝがれる。

山をみるには、距離といふことが一番大切だ。實をいふとこの針ノ木峠は、日本北アルプスの北端に近い爲めに、全體の觀望がすこし遠すぎる。一ト眼にひろくは見へるが、そうしてそれは勿論雄大ではあるが、個々の雄大さがその細微な點をしめさない爲めに、グッと來る感じは強くない。槍一つに就ていへば、燕ぐらゐから見るのが丁度見頃だらうとおもふ。去年、白馬にのぼつた時、頂上に達したのは夕方のことだつたが、そこでみた立山は實に立派だつた、近いのだ、山をみるには、どうしてもある近さがいる。

おの〳〵の山について、その近さをもとめる時に、日本アルプスについては、われ〳〵はいつも縱走を續けてゐなければならない。

針ノ木岳へのぼるかどうかゞ問題になつた、往復二時間かゝるそうだが、二時間かゝつてのぼつて、もしも濃霧だつたらつまらない。下りることにした。雪溪までの四五丁の下りは、それこそ崩壞せる急坂だ。雪溪は、短かいが、頗る急だときいた。みるとなるほど急だ。去年、槍澤の雪溪ですべつてから、雪溪の下りといふものは、あぶないところもあり、また、おもしろいところもあるとおもつてゐたが、こんどは、雪溪についてだいぶ得る處があつた、大したこともあるまいと、カンヂキをつけて、一歩々々と、足をふみしめて下つた。一人のふんだあとを、ふんで、二三尺位づゝすべるのは大へん樂だが、しかし、どうかするとこれはあぶない、おそくとも、やはり一つ一つふみしめてゆくのがいゝ。どうやらだいぶ調子がよさそうだ。そうして、二十間も下つたかとおもふ時、私より四五間先きを下つてゐた、案内の北澤君が、足をすべらしたと見へて、すうッと三四間すべりおちた、まつすぐに落ちたのが、いつの間にか横になつて、せなかにしよつた荷と共に、マリの樣になつてころがつた。それをみて、アッと思つた私が、足をふみすべらした。大町でも屈指の案内者といふ強の

者さへすべり落ちるほどの急雪渓であることが、脚のあまりよくない私をあなやとおもはせたものとみへて、あつと思つた瞬間に私はすべり落ちたのだ。

私はしまつたとおもつた。しまつたとおもひながら、急いで、すべる姿勢をなをそうとした。不意にすべると、どうしても脊中ですべる。脊中ですべるとあぶない。これは去年、大槍の小屋の人に教へられた上に、教へられる前にすでにそのすべりのあぶないことを經驗した。今度もすべつて、あつと思つた時、すぐそうおもつて、くびだけはあげたが、姿勢をなをすにもなをさないにも、すぐ下に佐村がゐて、どかなければぶつかる、ぶつかれば、お互ひにどんな怪我をするか知れない、どかせようとおもふから、私は、すべりながらも大きな聲で「あぶない、あぶない、あぶない」と連呼した。だがきこへないのか氣がつかないのか、佐村はどかない。ところで、何もかも一瞬の間だ。急雪渓をすべり落ちるといふはやさは、實に驚くべきはやさだ。姿勢をなをそうと懸命に努力しながら、餘裕をつくる事もできないほどのはやさですべる

私は、たちまち佐村の右の脚にぶつかる、ぶつかる、そのはづみで佐村は、どこかへケシ飛んだがそれをみてゐるひまはない、それこそ一瀉千里、佐村にぶつかつた爲めによけいハヅミがついたか、われながらおどろくようなはやさで滑走し、左りに折れて、雪渓が大きなカーブをなしてゐるところをすべりぬけ、そこをすべりぬける時分から姿勢を漸く正しくする事ができて、私は半身を起すと共に、しりですべつていつた。もうすつかり餘裕ができた。みると、雪渓のまん中にかなり大きな石が一つある。すべつてゆく方向とはすこし違ふが、かうなるともう自由だ、スッと腰でカヂをとつて脚をその方にむけると、スーッと、調子よく無事着陸だ。ヤレ〳〵とホッと息をして、さてとう〳〵大滑走をやつてしまつた。糸立てはどつかへとんでしまつた。金剛杖はしばらくはもつたまゝすべつてゐたが、雪にすれて指が痛いので、途中で放棄した。カバンはひもがきれて、どつかへおいてきぼりだ。セーターとしやつとの間には雪がはいつてつめたいが、だが幸ひに、どこもけががなかつた。痛み所もない。まづ

めでたかつた。そうおもつて立ちあがつた私は、はぢめから、あの大きな石のところまでいけばもう大丈夫といはれてゐた石が、そばのはいまつの中にあつたので、雪渓をよこぎりながら、すべつてゐる樣子が、さぞおかしかつたらうとおもふと、急におかしくなつて、思はずふきだした。大きな笑ひ聲が靜な谷にひゞくと、私はもうおかしさをとめる事ができなくなつて、石に腰かけながら、笑ひくづれた。

すぐ佐村がやつて來た。佐村も、うんとぶつかられたので、けし飛んだまゝ、かなりすべつたらしい。金剛杖は折れ、リユックサックのひもはきれ、さん〳〵なていたらくだ、でも、これも幸ひにけががない。そのうちに坂西がやつて來た。このさはぎで、當事者よりもたれよりも、一番たまげたのは坂西だ。坂西は、私のすべり落ちるのをみて、「もうだめだ」とおもつたそうだ。(八月五日)　幸にかうやつてだめにならずにゐるからいゝようなものゝ、これが、だめになつてしまつてゐるのだつたら、今頃は、「まことにはや」とかなんとか、くやみの一つもいはれてなければなるまい。「いや、

實際大へんなことでした、命びろいです」と、坂西には、まつたくこれが大變なことであつたらしい。私自身としては、加速度の力ですべつてゐることが、何かしらそのうちに危險な事をひきおこしはしないかといふ心配はあつたが、幸ひにも、自分に、だめだといふ考へは少しもなかつた、(もしもそれがあつたら、けがの一つや二つしたかも知れない)。そうして、すべつてゐる姿勢が自分のおもひ通りになれば、この難關は樂にきりぬけられる、だから、すべつてゐるうちも、半身を起そうおこそうと努力したわけだつたが、はじめのうちは、それが仲々できなかつた。すべつてゐる心持は、むろん自分によく分るが、すべつてゐる形や、すべりかたについては、自分ではちつとも分らないほど急雪溪のすべりははやいものだ。心の餘裕が、よほど擴大されてこないと、おもふだけはおもつても、自分のからだをどうもできない。「でも、あの中で、よく佐村君に注意をなさることができました」と坂西は感心してゐたが、その位の餘裕は樂にあつた。私は北澤君に、

「君がわるいんだぜ、君さへすべらなければ、わしだつてすべりはしない、何しろ君がすべつてしまつたんだから」

といつたら、さすがの北澤案内人も、此時ばかりは苦笑しながらだまつてゐた。

間もなく紫丁場といふ、水のあるところへ來てやすんだ。この邊の石はみな紫がゝつてゐる。紫丁場といふ名がきにいつた。色もよし名もよし、水をくませてのみながら、私は、私の正面に咲いてゐる山櫻をみた。高山植物としての山ざくらといふものは、普通の山櫻とはまたおもむきが別で、花やかさもすぐれてゐるが、すべての感じは實にしをらしいもので、普通の山ざくらよりもなほ一層可憐なものだ。

いよ〳〵針ノ木澤になつて、平(ダイラ)の小屋までみちのりにすれば二里ぐらゐのところを、五時間もかゝつて、つぶさにこの嶮難惡絶をあぢはつた。徒渉すること十數回。丸木橋をわたること數十回。雪溪を横ぎること數十回。岩壁に手をかけながら、からくも足だまりをみつけてあるくこと十數回。崩壞せる急坂なぞ無數。のぼるかとおもへば下り、下るかとおもへば攀づる。岩石の間をあるく時なぞ、飛びのり、飛び下り、あるひはおどり越へ、石と共にくづれ落ち、私としては、まづ生れてはじめて通つた惡路である。四十年の前、チエンバーレンがこのみちを通つて、惡絶嶮絶といつたのは無理もないことである。アルプス登山案内の矢澤氏等は、これに對して「今や又難嶮の感なし」といつたが、事實そうとすると、チエンバーレンの通つた時の針ノ木澤といふものは、どんな有樣だつたかと、恐しいような氣もするが、しかし私は、チエンバーレンのとほつた針ノ木澤も、大した違ひはあるまいとおもふ。四十年前と四十年後と、その間に、針ノ木澤の難嶮が、その感をなくなすべきどういふ事情も別段なかつたらうとおもふ。これは到底人の手のつけられるような溪谷ではない。また恐らく手をつけるべき必要もなからうとおもふこの溪谷は、自然の狀態にまかせてある、風雪雨水の狂奔にまかせてある、その針ノ木澤は、四十年はさておき、五十年も百年も、依然として依然たる難嶮の針ノ木澤だらう。

私は、このみちについて、難嶮のほかに格別の記憶をもたない。隨分と迂餘曲折したみちであつたが、その迂餘曲折を、一々に叙することはできない。どうまがつて、どうくねつて、それがどうなつたんだか分らない、ただ、部分的に度ぎつい印象があり、その部分的の度ぎつさを全體的にひきのばした場合、はつきりしてくるのは、やはり難嶮の二字である、言語道斷の四字である、みちの詳細については記憶はないが、難嶮の記憶だけは、これはあまりに明瞭だ。

この難嶮の中で、尤もなやんだのは、案内者の脚のはやいことだつた。のぼりには、いつもいつもおくれてゐた案内者が、下りとなると、猿のようにはやかつた、あんまりはやいので、みちの分らない事もたび〳〵だつた。これには閉口した。なるべく案内人にはなれないようにしなければならないとおもふと、隨分いそがしかつた。いそがしいばかりでなく氣がもめた。そうして、なれないこの惡路に、咄嗟に足場をさがしだして、案内人のかげを追ふということは、思ひもよらない疲勞を感ぜしめた。脚もなにも、萎へてしまふようなことがたび〳〵あつた。時間がはやければ、案内人のあとを追ふにそんなに苦勞もせず、迷子になつたら、案内人がさがしにくるだらうとすましてもゐられるが、日暮るゝに近からんとして、しかして道遠しといふような時は、そうおちついてはゐられない。迷子になつたらそれこそ命がけ、この事は、案内人には、よほど考へてもらはなくてはなるまいとおもふ。かういふ厄介な山みちを、案内者の都合だけであるかれては馴れないものは困りきるのだ。

徒渉といふものが、またずゐぶん厄介なものだ。底の平な川なら、かなり急な流れでもそう大した困難はないが、驚くべき急勾配の澤を流れる、驚くべき水勢の谷川を徒渉することは、石から石へと跳ぶことが多いだけ、うつかりすると、水に足をとられたり、すべつたりする憂ひがある。もし川の中で倒れたら、恐ろしい水勢に、流されもしやうし、石でからだをうちもしよう。透明な水でありながら、石に激してもれあがつてゐるようなところは、深さも容易に分らない、自然、足を、どこへおろして

いゝか分らないようなところではまどふこともしば〳〵ある。それに、雪をとかしたばかりの水だから、つめたいことゝいつたらお話にならない、おつこつたが最後、これだけでも、時と場合ではたすからないかも知れない。おとゝひ(八月四日)の新聞をみると、針ノ木澤へおつこつて死んでる人がある、ひと事ではない。

それから、丸木橋も厄介だ。尤も、まる木橋といつても、大てい丸太二本はわたしてあるが、それでも隨分あぶなつかしいのがあつて、おつかなびつくりわたるところなぞザラにある。私は先へいつて知らなかつたが、佐村が、そのうちのどれかで、とう〳〵おつこちたそうで、あぶないことだつた。

針ノ木澤のもうよほど裾の方で、川幅もかなりひろくなつたところで、ふとい丸木橋がはずれて片端が川へおちてゐたそうだ。先へいつた五人の學生は、仕方がないから、そこをもみんな徒渉したそうだが、あんまり水がつめたい爲めに、一氣に徒渉することができないので、止むをえずまん中の石にあがりこんで、足をあつためてから、漸くまたわたつたといふことだ。これは小屋へついてからきいた話だが、私共がその丸木橋へ到着した時は、私たちより小一時間もさきにいつてゐる筈の寫眞技師の一行が、五人がゝりで、やつとその橋を、どうやらかうやらまア歩ける程度になをしたところだつた、おかげで私共は、徒渉の厄をまぬがれた。

徒渉、丸木橋、二つの厄介物のほかに、時々心膽をさむからせるのが、渦卷く急湍の上を、石壁に身をつけて、僅な足がゝりをもとめてわたるので、これは、その邊の水深がしれにくい爲めに、かなり心をビクつかせる。

たゞみちが惡いだけなら、その困難をたへ忍べばいゝのだが、危險な事項をともなつてゐる水については、堪へ忍ぶだけでは事がすまないので、勝手の知れない山中では、これが一番行人のなやみとなる。一つの徒渉がすめばやれよかつたとおもひ、一つの丸木橋をあやしげな足どりでわたつてしまへば、まづこれですんだとおもひ、同時にあとの事がすぐ問題となる。ところがこの針ノ木澤、これはまアなんといふ厄介

な澤なのか、今わたつたばかりの丸木橋を、五六間の上手にみて、また次の丸木橋を反對の方向にわたらなければならないところが、いくつと數へる事が出來ないほど澤山ある。徒渉もそのとほりだ。これにはほと〳〵愛想がつきたが、時としてかうやたらに肝癪がおこつてくる、大ていにしたらよさそうなものだとおもふのに、意地わるく事故は頻發して、たつた一つの岩の爲めに恐しい大迂回をして、一の川を、かがるようなあんばいに、右岸から左岸へ、左岸から右岸へ、さながら梭のとぶようにわたりわたりするめまぐるしさ、天を仰いで浩歎して、どうも實にいやな澤だといつたところが、人間の小さゝは、どうにもならない、天を劈くような針ノ木岳の大岩塊は、人間の弱少をあはれむように、靜まりかへつて、徂徠する霧にその面をなぶらせてゐる。

山中、しば〳〵やすんだが、尤もながくやすんだのは二ヶ所ほどで、一つは川に沿ふた少々の平地、こゝでは、北澤君が食事をするといふので、澤の水をくんで湯をわ

かしてくれた。湯のわくのをまつま、長々と土の上にねて、坂西と自然を語る。針ノ木澤に紫の煙がたなびいて、マニラの煙草のにほひが、木にも草にも、水にも、雪にもうつるのを、こんな時こゝろゆくまでたのしむ。もう一つの休み場所は「南澤の露營地」と稱せられる廣場、こゝも川に沿ふて、いゝ地勢だ。

私は十數回の徒渉で、とう〳〵足をいためた。かゝとをすりむいたのである。痛いのをがまんしながら歩いたが、平地とちがつてこの歩行は實につらかつた。二時間ほどを、がまんにがまんしたが、とう〳〵がまんしきれずに、南澤を出發してからまもなく、足の手入れをすることにした。坂西がみて、すつかり手あてをしてくれる。川の砂が足袋にはいつて、それでかゝとがすりむけたのだ、デルマトールをつけて、坂西が、持て來たビックをはつてくれた。ビックがつきにくいので、坂西が、口をかゝとにあてゝ、ビックがつくまでかゝとをふくんでゐてくれた。足のかゝとに口をあてもらつてゐる心持は、かなり恐縮したものだが、この態度に、坂西の眞情が流露し

てゐる。そうして、坂西は嘆息する様にいふ、

「どうも先生の皮膚は弱いですな、なめらかで、私共の足とはまるで違ひます、まつたく坂西が嘆息する様に、私の足の皮膚はどうも弱い。徒歩旅行がすきで、隨分とこれまでかけまはりはしたが、足を痛めない旅行といふものはほとんどないほど私は旅行のたびに足をいためてゐる。今度は、不思議にまめができなくつていゝあんばいだと思つてゐたら、とう〳〵かゝとをすりむいてしまつた。手當てをしたので、足袋のあたりが大分やはらかくなつたので、大にあるきいゝ、もつと早く手當てをすればよかつたと坂西がいつたがまつたくだ。もうぢきだらう、もうぢきだらうとおもつて歩いてゐたのがわるかつたのだ、これは旅行者の十分心得べきことだ。

あゝ難行だつた。が、足の手當てをしたのち三十分ばかりで、ダイラの小屋の對岸に到着することができた。川をわたれば、そこに、今夜の寢どこがある。しかし、川でまへにも一軒小屋があつた。これは電力の水番の小屋だそうだが、その番人は、ダイラの小屋の設備の不十分なことをいつて、しきりに一行をとめたがる様子だ。だがみたところ、家といひ人といひ、なんだかとまりたくない、で、こゝにあるといふ岩魚を六尾一圓でかつて、とにかく川をわたることにした。こゝが有名な籠わたしだ。私共は岩魚をかふまへ、まづ川へいつてみた。

籠わたしは、はりがねがきれてしまつて、久しくわたれなかつたのが、やつとけふ修繕ができて、わたれるようになつたのだといふ。新しいはりがねが、わたしてあつて、それに、幅廣の板が四手あみの様なあんばいに吊つてある。もとは本當の籠だつたそうだが、今は一種のブランコだ。一人の時は、自分で、上のはりがねをひいて渡らなければならないそうだが、けふは幸ひ仲間が多いので、寫眞屋さんたち二人ばかり先へ渡つたのが、引ぱつてくれて、坂西がまづ渡ると、坂西もひつぱる役目にまはつて、やがて私がブランコに乘る。

この川が黑部川だ。黑部といふ名は、日本アルプスを語るものに對して、何といふ

魅力をもつた名だらう、黒部といふ名をおもふ時に、たゞちに、深い深い溪谷のすがたが、神秘的に、かつ夢幻的にゑがきだされる。白馬にのぼつて、劔から立山一帶をみた時、そこに何ともいはれない深さを感ぜしめる溪谷をみた時、あれが黒部ではなからうかとおもつた。黒部であつた。そうおもつた時のそのおもひには、深い誘惑を感じた。燕の頂上に立つと、湯俣から野口五郎をみながら、高瀨の深い溪谷をみおろして、恐らく黒部と共に日本アルプスにおける二大溪谷といふべきものだらうとおもつたが、しかし黒部の方が、なんだか黒く深く感ぜられて、以來、黒部は、尤もなつかしい名であり、みたいみたい谷であつた。

針ノ木を越へる私共は、どうしても黒部川をわたらなければならない、これは、私にとつて、實に非常な興味だつた、興味といふよりもむしろそれは熱情であつた。黒部がどんな顏をしてゐるか、いかに深い力をもつて私共にせまつてくるか、みただけで私共は、その川中に引こまれる樣に感ずるだらうか、どんな音をして、どんな形をして、そうしてどんな色をして、その水は流れてゐるだらうか、玲瓏透徹の極ともいふべききれいな水が、青くみへ、その青さが、黒くみへるほど、黒部川は深いだらうか、水は、狂奔してるだらうか、どつとおめいて走つてゐるだらうか、亂舞してるだらうか、水と水とが、相うち相たゝかつて走つてゐるだらうか、白いしぶきが一面にたつてゐるだらうか、魚は、浪にもまれてむせかへつてゐるだらうか、石と石とは悲鳴をあげて、水の狂暴に泣いてゐるだらうか、左右の山は、亂暴な水の挑戰に、憤激しつゝその土砂を水の中になげこんでゐるだらうか、オー黒部川よ、川を愛することを私の如く、川を好むこと私のごとく、川を知ること私の如きものが、黒部をみんとして、針ノ木の嶮をすぎつゝ、つひに黒部に流れ入るべき針ノ木澤の水に、まづ足をひたしたることを、生ける黒部は知つてゐるだらう。黒部の溪谷の深さは、私の見んとする深さである。

だが併し、いよ〳〵黒部川へ來て、その川岸に立つて、生れてはぢめて黒部川をみ

た私は、輕い失望を感じた。黒部の水量は、實に豊富だときいた、が、恐らくそれは下流のことで、籠わたしの如き上流では、そう大した深さではない、すなはち豊さではない。私の心にあつた黒部は、深山中の川としては、非常な廣さをもち、その廣さは深い水をもち、しかもその水面は川岸より非常に低い位置にあり、そうして水は深いために、岩石が川底にありながら、水にはげしい凹凸ができずに、平に、しかも驚くべきはやさをもつて流れ、すなはち水色は、黒かとまがふ濃藍色だらうといふのだつた。が、この想像にあたる點が黒部にありとすれば、恐らくそれは下流の黒部で、上流は、川幅はかなりあるが、水も、淺くはないが、しかし、どこの山にもありうる、つまり普通の川であつた。黒部をみて、なるほど黒部だと、その魅力に幻惑されたいといふ私の希望は、殘念ながらみたされなかつた、と同時に、私が、黒部を、私のおもふ樣な黒部をみたいといふ考へは、これで一層濃厚になつた。

北澤君が支度をしてくれたブランコへ、私は、落さない用意に金剛杖を下にしいて身を托すと、むかふ河岸の人がひつぱつてくれる。重いから、仲々スル〳〵とはいかない。引ぱつてもらつてゐる時には、自分も上のはりがねを引ぱらなければいけないと北澤君は寫眞屋の二人がわたる時にそういつたが。引ぱられてゐる德義上なる程そうしなければなるまいが、そうするとしかし水がみへない、私は御免かうむつて、はりがねはひかずに、ブランコの兩方のはりがねをしつかりもちながら、水をみた。黒部の水はきれいなので、およいでゐる魚がわたりながら上からよくみへるときいてきたが、もうたそがれの川には、魚にも今が丁度夕飯どきだらう、うちへかへつてしまつて一ぴきもゐない、たゞ白泡をかんでゐる流れがみへるだけだ。ゆらり〳〵とゆられながらひかれてゐる心持は、はじめ東京で地圖をみて、「籠渡場、ハ、ー」とおもつたほどけんのんなものではない。たゞいよ〳〵むかふ川岸といふところの四五間ばかり、こゝは激流ながらも水の青くみへる所が、ちよいとひやりとさせる、尤もそれも時間でいへば、ほんの二三秒、あなやとおもふまにたちまち川岸へひきあげられて、

ホッと安心、だがこの岸が、實に非常にせまいので、あがつてからかへつて危險を感ずるほどだ。わたるのは、一人づゝだからなか〳〵時間がかゝる、小一時間は、この籠わたりにかゝつたらう、やがてみんな渡り終つて、ダイラの小屋に入る。

坂西にいはせれば、「ヤレ〳〵命びろい」だが、この小屋の感じは、命びろいといふべくすこしさびしい。やつとあいたばかりで小屋番がきてまだ間もないからだといふことではあつたが、小屋としての支度がまだなんにもできてゐなかつた、それに、大體の設備があまりよくない。二三年前に「大毎」が寄贈した小屋といふだけあつて、小じつかりしたいゝうちで、おまけに中二階といつたつくりにはなつてゐたが、山小屋はどうか、大きな爐をきつておいてもらひたいものだ、この土間では火がたけない、では、山小屋らしくない。

小屋では御飯の仕度ができず、萬事北澤君がするんだから、晩めしはかなりおそくなつた。でも味噌汁には、北澤君が途中でつんで來た菜をいれて、これが大へんおいしく、それに黒部の岩魚といふのがあるので、これを味ふことが何よりうれしかつたが、しかし、せつかくのその岩魚にも、「あア黒部だな」、とおもふような味がなかつたのが物たりない、二尾のうち、一尾は小さく、これは身がしまつてゐてうまかつたが、一尾の、ばかに大きいのは、身がやはらかすぎて感心しなかつた、だが、何の好因緣ぞ、とにかくこれで、黒部の岩魚が味はゝれた。

「今夜は、祝杯をあげるのですな」と、雪溪の大滑走ののち坂西がそういつたが、あいにくこの小屋には、祝杯をあげうべき何物もなかつた。去年は白馬に、わざ〳〵ウオーツカをもつていつたのだが、もつていつた爲にしくじつたのと、酒は必らず小屋にあるとおもつたのでもつてこなかつたのが失敗だ。命びろひの祝杯も何だが、針ノ木澤の難嶮には、さすがにつかれた、煙草では、この疲勞はおぎなへない、ちよいと一ト口のみたいような氣がする。さて、今夜は、いゝ山の話をしてくれる人もない、では、默して靜に山を味はふか、煙草のにほひは室中にみなぎつて、どうやら私の室ら

しくなつて來た。私の默してゐるそばで坂西は、農大醫專の學生等のスキーの話にわりこんで、「わし等の方は、日本のスキーの元祖だ」などと、學生を煙にまいてゐる、なるほど坂西は長く高田の師團にゐた。

さて、寢具はないとおどかされて大に閉口し、いそいでシャツをさがさせたところが、シャツがなかつたので更に大に閉口してゐたところ、毛布があるといふのでほつと安心し五六枚たのんでおいた、おかげであたゝかいねどこが出來た、この毛布はいゝ毛布だつた。ダイラの小屋は針ノ木の夢をおさめて、黑部の川の水音につゝみ、さびしくも靜かな夜はふけわたる。（八月六日）

朝起きると、すぐ川へ下りて顏をあらつた。黑部の川で顏を洗ふといふことは、生涯のうちに、幾度もないことだ。そうおもひながら顏をあらつた。洗ひ終つて、しばらく川をみた。爐邊に煙草をすひ、朝餐をすますと、間もなく出發の準備にかゝり、みんなの支度のできる間、私と坂西は、下流の、電力小屋のそばにかけてあるつり橋をみにいつた。電力小屋は、構造が、なか〳〵よくできてゐるようだ。私はこれをみて、私も、日本アルプスの、どこかごくいゝ處に、かういふ家を一軒もちたいとおもつた。「山の家」。日本アルプスのすべてを見終つたら、私は、この、「山の家」の建設について考へたい。

これから岩魚をつりにでようといふ小屋の人と、黑部の川についてはなした。この時みた黑部の水は、水量としてはまづ多い方であるそうだ。これで多い方なら、たとひ川へ落ちたとしても、そう恐るべきものではなからうといつたら、どうして、この川に落ちて助かつた人はまづないといふことであつた。淺いようでも存外深いし、また水がつめたくて、その爲めに死ぬといふことである、なんとしてもこれは、恐るべき川には違ひない。

小屋をでるとすぐ山みちになつて、それが「かりやす峠」である、大してこれは、興味ある峠ではない。たゞ、中腹以上に、木挽澤山と越中澤？山との眺望がある、越中

澤の、雪の、非常にふかいのが、山を大きなものにしてみせる。山が、平凡な名でありながらその山容が雄大に見へる時、ちよいとこれがおもしろい感じになる。一たい、山の名には非常におもしろいのがある、野口五郎だの、黒部五郎だのといふ名は實におもしろい名だ、いかにも山をいきものとしてあつかつた感じである、黒部五郎といふ名が、五郎！と大きくよべば、すぐオーとこたへそうな心持を感ぜしめる。（八月十日）野口五郎といふ、ツンツルてんな小倉の袴でもはいてゐそうな、無邪氣な書生のような名が、あの雄大な山を、みる人をして、その心の中に、至極無雜作にとりいれさせる。山に對する親しみが、名をきいただけでも、なんとなく起る。そうして山をみて、その雄大に驚くと、こんどはその、野口五郎といふ無雜作な名が、またばかに雄大に感ぜられる。だれがかういふ名をつけたか、おそらく調べもつかないことだらうが、調べのつかないだけ、却ておもひもよらない名付親のあることも想像されて、興味がふかい。かういふ名は、多分、いろ〳〵な便宜でつけられたらう。始終この山

中を徘徊する獵師たちか、あるひは、深山大岳を跋渉する修行者か、そういふ人々が、他にかたる場合の便稱としていろ〳〵によびなしたものが、いつかその山の名となつてしまつたのだらう。

形につけた名、感じにつけた名、符號としてつけた名、土地の狀況についてつけた名、それらの名の錯綜が、地圖の上に文字となつた時に、みな非常にちがつた感じの名であることが、どれだけ地圖の表てをおもしろからしめるか、そうして、地圖の上で親んだ名が實際に踏破する山々のいたるところにあらはれた時、けつして未知の山のような氣がしないのも、みなそれ〴〵に、おもしろい、いづれも特殊な名を、その山々がもつてゐるからである。

この峠にさしかゝると、間もなく、私共は、時々雨におそはれた。そうして小さな雪渓を、二つ三つよこぎつた時、朝、私共よりはよほど早く、平の小屋をたつた寫眞技師の一行が下つて來たのにあつた。話をきけば、ザラ峠は、雨雲におほはれ、濃霧

につゝまれてゐて、到底撮影の見こみがない、それで、平ノ小屋まで引かへして、五色はもう斷念するのだといふ。お互ひに別れの言葉をのべて、私共は峠へむかつたが、ザラ峠の風雨と濃霧といふ報告はあまりありがたくなかつた、たゞの山路の雨なら、雨もたのしいものだが、雪溪の上でのひどい雨はこまりものだ。

峠で休憩した。地圖には名も記されないほどの峠ではあるが、場所柄とて、かなり高い峠である。峠からは御山谷の大きな澤をへだてゝ立山の頂きがみへる。ふりかへつてその反對の方をみると、烏帽子、三ッ嶽、野口五郎、赤牛などの山々がみへる。木挽澤と越中澤とはすぐまぢかに見へる。こゝから見る烏帽子は、針ノ木からみるのとはまるで違つて、とんがつた山にみへる、いはゞ小さな槍ケ岳のようにみへる。そうしてきのふは、前正面にみたものを、けふは、後正面にみるのである。僅か一日の變化としては非常に大きな變化である。この變化についてみても、昨日一日の行程が、隨分ながいものであつたとともに、その曲折のほども知られる、と同時に、いくら大きな山の樣でも、昨日の前が今日の後になることから考へると、そう大した大きなものではないような氣もする。がまた、その大したものでもないものに、昨日一日あれだけの努力をしなければならなかつたかとおもふと、山といふものこそ、實に、はかり知られぬ大きなものである。

晝食をするにはまだ少しはやい、それに、水がない、水のあるところまでと、峠をおりた。のぼりとちがつてこの下りは、大いへんいやな下りだ、かなり廣い雪溪を横ぎらなければならない、その雪溪は、雪のうすい雪溪で、雪におしつぶされてゐる白樺などが出かゝつてゐるために、一層すべり落ちやすくなつてゐる。佐村と坂西が、かはるゞ先行して、私の爲めに足場をつくつてくれる、が、雪溪ばかりでなく、此峠には、恐しくみちの崩壞した個處がかなりあつて、さしたる難場といふわけではないが、はなはだいやな道である。

いよ〳〵雪溪へ下りるといふところまで來て晝食にした、こゝには水がある筈だ、

どこにあるときくと、谷底だといふ、なるほどあるには違ひないが、いくらあつても、谷底では話にならぬ、しかたがない、水の音をきゝながら晝食だ。

下の雪溪が中谷で、それをのぼるとザラ峠だ。ザラ峠は濃霧だ。くらい霧の中から雨がボツリ〳〵とやつてくる、大粒な雨が、しかもかなりはげしくやつてくる、手にもつてゐる握り飯にもさん〳〵とふりそゝぐ、罐詰の中へもボツリ〳〵とはいる、あゝいかにもわびしい感じだ。この時、旅愁がつと胸にせまる。ほんとにわびしい感じだ、もうこのまゝ旅行をやめて、東京へかへりたくなる。さりとて、かへれるわけはないのだから、豫定の旅は依然として續けられなければならないのだが、そうして勿論つゞけるのだが、それにも拘らずそういふ感じのせまるところに、旅でなければ味はれない氣分がある。芭蕉が、旅によつて芭蕉自身を發見したように、私共も、都會にゐては味はへない氣分、また、都會にゐても、時として何となく一種のさびしさを感ずるが、それがどういふわけとも分らない程捕促しにくい氣分をかういふ時にしみ〳〵味はふ。あゝ、かりやす峠の雨中の食事。私は、聲をあげて、「お母さん」とよびたくなつた。もしも、「母よ」とよぶ私の聲がこだまして、この山々谷々にひゞきわたつたら、木も、草も、山も、谷も、雪も、水も、ともに「母よ」といつてくれるだらうか。私の母は私にとつて、三十餘年前の存在である。しかし、そういふながい隔りを隔りともせず、母はよくたづねて來てくれる。四十にもなる男が、「お母さん、さびしいです」といへば、人は笑ふだらう、だが、母は、笑ひはしない、「さびしいかい、そのさびしさこそ、お前の力だよ」と、母は、その青白い顔をふりむけて、大きな眼で、ヂッと私をみてくれるだらう。つまらないところも、その時の感じによつて、つよい印象となる、私は、かりやす峠の雨を、永久にわすれない。この僅な晝食事に、さびしさに緣して、私のいろ〳〵ななやみが、またもくりかへされた。食事がすんで煙草をふかした。さびしい時のたばこがどんなものであるか、これは、その境遇に身をおかなければ味はへない、しめつた空氣の中に、好ましいにほひが、煙りと共にたちの

ぼる、しみ〴〵と、そのにほひをみつめるともいひたい氣分の中に、舌にのこる苦味が、一層つよく心をしげきした。

かんぢきをつけて、雪溪に下りたつた。雪溪は大へんな風だつた、雨をふくんだ雪溪の風はつめたかつた。いよ〳〵旅は心細いものになる。だが、心細いものになるといふことと、心細くなつたからヘコたれるといふのとは違ふ。心細さのまつたゞ中に身をおきながら、敢然とすゝむといふところに、自分みづからの強さの影がさす。心細ければ、心細いでそれでいゝのだ、やせがまんをして、心細くないといふ必要はないのだ。心細いがどうしたといふ、ひるまない態度こそ、人間における尤も正直な態度である。正直といふことほど、強いものはない。ウソといふことほど、弱いものはない。ウソをいふ人間は、ウソをいふといふことだけが、たゞ一つたしかな存在であつて、それだけが正直なことであつて、それ以外、何一つとして信用しうることはないのだ。

強いものほど恐れる。豊かな心をもつたものほどさびしさを知る。やたらにさびしがる女が、やたらにつつかひ棒をもとめて、どんな男にでもすがりつく樣なさびしさでなく、豊な心の中に萬物をいれて、さびしみといふ沈痛な心持で、しんみりした接觸をはかるものにこそ、花やかな世界は現出する。

ザラ峠ののぼりの雪溪は、きはめて緩傾斜の雪溪だつた、しかし、仲々ながい雪溪だつた。雪溪の横のがけに、ところ〴〵に山みちはみへてはゐるが、雪がおほいのでそれは通れないのだ。いつもならもう通れるみちが通れない、その爲めにこの雪溪は、こんなにまで長いのだ、この雪溪のさきは、くらい濃霧につゝまれてゐる、何となくそれが人にせまるような感じだ。お伽ばなしの王子が馬にのつてゆくほどに、たちまちみちが左右からせまくなつてくるといふみちは、こんなみちではなからうかと、そんなことの考へられるほど、このみちは、ふさがつてしまひそうな感じのみちだ、この、雨と濃霧で。

やがて中程までくると、かなりな遠方に、五六人の人かげがみへる。私はザラ峠を越へて來た旅人の一行だらうとおもつたら、北澤君は、「さきへいつた學生でせふ五人のようですから」といふ、「それにしては、おかしいな、あの人たちは、もうよほど先きへいつてそうなものだが、どうして今頃こんなところにゐるのだらう」といふと、「先生たち、みちがわからないので、わしらをまつてゐるのでせふ」そういひながら、私共がやすんでゐると、一人の學生が下りて來た。近づいたのをみると、なるほど前にいつた學生の一人だ。話をきくと、峠は烈風と、雨と、霧とで、危險で、とても越へそうもない、それでみんなは、平ノ小屋へ引きかへすのだといふ、そういふ顏色は大層わるい、よほどまゐつたものと見へる。もつとも、小石を吹き捲くといふほどの烈風に、おまけに一寸さきも分らぬとあつては無理もない。北澤君も、しきりに五色の尾根の猛風について語る、が、しかし、こゝまで來たことだ、いけるところまではいつてみなければなるまい。私はだまつてゐたが、坂西は、學生と北澤君に、「行かう」

といつてずん〳〵あるきだした。あとで坂西が、「先生もあの時は……」と、さも〳〵私が閉口したとでもおもつたらしい口吻をもらしたが、これは坂西にも似合はない見當違ひだ。私は自分が一番不得手な雪溪さへ、のぼらなければならないとおもへばのぼり、下らなければならないとおもへば下る、ザラ峠の暴風が、たとひ難艱であらうとも、自分がそれへぶつかつてみずに、やめるなどいふものではない。

とにかく私共がいくときいて、學生等も、下るのを見あはせてついてくることになつた。可哀相にはなはだ生氣がない。この、引かへそうとした學生等の態度は、二樣の意味で、いゝとも惡いとも批判される。なんといつても、山といふものは、頗る危險なものだ、烈風、猛雨、濃霧などについては、用心に越したことはない。だから、これは危險だとおもつたら、引返すなり何なり、とにかく機宜の處置をとらなければならない、むかふみずは、山あるきにとつて、一番けんのんなことである。だがしかし、どんな場合にも、意氣を沮喪さしてしまつてはいけない。意氣が沮喪してゐては、

折角助かるところでも助からないようなことになる。この青年等は、いづれもみな、なか〳〵甲斐〳〵しいなりをしてゐたが氣力の方はあまりかひ〴〵しくない、青ざめたみんなの顔をみた時は、なんだか氣の毒になつた。

濃霧につゝまれたながい雪溪、時々、その霧がサーッときれて青空のみへる時もある、かとおもふと雨がくる、雨がくればわびしく、青空が出れば、急にはれ〴〵する、雪溪の霧や人ほど人をぢらすものはない、またさびしがらせるものはない、だが、さびしみつゝもぢれつゝも、とにかく峠に近づいた、峠には雪がない、雪がとけたばかりと見へて、芽ばへる草は漸くいましめをとかれたような形だ。ぬかるむみちをかけるようにして、下りにかゝるところでしばらく休憩した。五色へは、こゝを左りにとるのだそうだが、濃霧の爲めに、眺望はすこしもない。谷から吹きあげる風は、實につめたい、雪溪の寒さに閉ぢられ、あの寒風に眉に粟を生じたのが、この吹きあげる谷風には、どうやらからだも凍つてしまひそうだ。

やがて一行は、烈風の中をかけ下りた。笠は飛び、糸立は舞ふ。みんなは石を谷にころがしたような速さでかけ下りる。大きな、かなり急な雪溪をかけ下りて、また山みちに入り、そこをかけ下りるうちに、妙なところへ出た。そこは非常な急坂だが、その急坂は、たゞの土や砂とちがひ、すべてが、非常にこまかい割栗でできてゐる。人間の手間でこんな割栗をこしらへようとおもつたら、それこそ大へんな手數だが、それがこゝには自然にある。どうして自然にかういふ割栗ができるか、それは分らないが、とにかく山は不思議なものだ。昨日針ノ木澤では、一山ほとんど切り石でできてる、不思議な光景に接した。皆手頃にうちわられたこの切り石は、どうしてできるか、それは分らぬ。とにかくハッパをかけて、こまかく粉碎したようなその石の世界は奇異なものだつたが、この割栗のザラも、どうしてこんなものができるかとおもふと、たゞもう奇異の感にうたれる。

ザラ峠といふのは、恐らくこれから出來た名だらう、そうとすれば、これは、名實

ともにおもしろい峠だ。かういふ特殊な形相をした峠といふものは、恐らく外にはあまりなからうとおもふ、これが、何といふ複雜な感じを私に與へることだらう。ザラ峠、是は動いてゐる峠である、捕捉しえない峠であゐ、何がザラ峠の正體であるか、明らかにこのザラが、ザラ峠の名のよつて來るところとすると、この峠は、流轉の峠である。流動の峠である。私共は、北澤君のいふまゝに、このザラの中にあしをふみいれて、そのザラのすべるのを利用しながら、水をふむ仙人のような心持で下つた。はじめ、北澤君にそれをいはれた時には、多少危險の感じがあつた。だが、いはれるまゝに、そのザラに身をまかせれば、これは自然のエスカレーター、たゞ輕く足をあげれば、人は自然にはこばれる。七八人の人が、一列になつて、このザラを下るところは、なか〳〵壯觀だ。かうしてこの峠は、これまでにいくたりの人をかうしてはこんだらう。流動の世に、この峠は、如實にその流動を示して、人と共に動き、人と共に流れてゐる。人がゐなくても、流れるかも知れない、しかし、人をえてこの流れは

ほんとうに流れる。人と自然との諧調によつて流れる。谷の水も動いてゐる、しかし水は、人にかまはずに動いてゐる。雪溪で人がすべつて、人はとめどなく滑走するが、雪は定着して別に動かうともしない。このザラは、人をまつてはぢめて動く、人と共に動く、人とでなければ、かうは動かない。山が、かういふ面白い感情を人に示す、これは、山が試みる遊戯であらうか、小供がもしこゝへ來たら、どんなにこれをおもしろがるだらうか、小供は、歡びのときの聲をあげて、一せいにこのザラをはしり下るだらう。そうしたらそれが、どんなに壯觀だらう。

ザラ峠、このまたの名は、「さら〳〵越へ」である。昔、佐々成政が、援を德川家康に請ふ爲めに越中から信州へこした時に、このさら〳〵越へを通つた。そうして針ノ木を越へたといふのだが、對山館の主人は、ザラは越へたが、針ノ木は越へなかつたといつてゐる、どつちが正しいかこれは佐々成政にきいてみなければ、分らぬ。しかし、どつちにしても、ザラを越へたのは事實であるらしい。やせてもかれても成政は

一箇の英雄だ、その英雄の名を、この特色あるザラ峠に印し數十人の同勢をひきつれて、このザラを越へたことをおもふと、(尤も當時は陰暦の十一月、雪が深くつて、ザラの風貌はうかゞへなかつたとおもふが)この生けるが如くに動く峠のありさまに、史的幻想の濃厚にまつはるをおぼへる。坂西少佐を私の副官とすれば、さしづめ私は、何々將軍ぐらゐの格式で、この峠を越へるにさしつかへはあるまい。ザラを下りるとまた雪溪だ、私は、このザラがよほどおもしろく感じられたので、しばらくこゝでやすんだ。

あとは緩傾斜の雪溪だ。雪溪といふよりも雪の大きなくぼみ。さつきザラの中ほどからみた時、下には濃霧のかげもなく、白い雲の中から青空が大きくのぞいて、さつとさした日のかげに、雪が白くひかつた。ほがらかな溪谷の感じ。ふところのひろい、惰圓形の大きな谷は、あたゝかな氣分に展開されて、下りてゆく人の心持を、たのしみあるものにした。この雪溪の末が湯川になる。湯川の右岸に沿ふて、草ぶかいみちを永々とあるき、日の暮れまへ、漸く、めざす立山溫泉について、二階の一室に旅裝を解いた。

足をみると、さん〳〵のていたらくだ。新しく右のかゝともすりむいた。爪をいためて爪先は紫色にはれあがつてゐる。これではとてもだめだ。入浴中、坂西と相談して、立山の登山はみあはせることにした。それに、室堂がまだあいてゐない。防寒の用意がまるでない。足を痛めないとしてもおぼつかないので、かた〳〵やめることにした、坂西と案内人をかへしたあと、一日二日この溫泉に逗留して、富山へ出て歸京することにした。

その夜は、北澤君慰勞の小宴をひらいて、北澤君大に醉ひ、翌朝未明に、坂西は北澤君をつれて山を下りる。私共は、滯在して、つかれを醫すると共に、どぜうの池に船をうかべて、のんきに山を眺つた、霧がはれたら、眺望はよからうとおもふのだが、山はすべて閉ざされてゐる。

この溫泉は、五六十室を有するかなり大きな旅館ではあるが、一年の半分は雪にうづもれ、營業期間はわづか三月位なので、家屋は荒れはてゝゐる、登山の足だまりにはいゝが、湯治場などいふべきものではない。二日滯在のつもりが、あまりつまらないので、翌日こゝをたつた、朝のことなので、山はすつかりはれてゐた。鷲岳、鳶岳、淨土、雄山、みな。ほがらかな空に、かゞやかしい面をみせてゐる。さあ山を下りる、のぼるべき山をのぼらなかつたことに、思ひはのこる、このおもひは續く、立山は、必ず、のぼられなければならない山である。

湯川といふ川、湯川といふ川につゞく常願寺といふ川、これはほんとにいやな川である。とめどなく山をくづす川、くづした岩石と土砂を、とめどなく流す川。理想も、希望も、事業も、感激も、こゝでは何もかもがくづれる。十數町、あるひは數十町にわたれる大崩壞、いつからとなく、いつまでとなく無限にくづれようとする大崩壞、いたましい國土の相をみつゝ、無限の感慨をこめて、藤橋へと下る四里のみち、こんな不快なみちは、かつて私の經驗したみちにない。

大岩壁に、コンクリートでみちがつくられてゐる、それがこはれて、一間ばかりとれてゐる。仕方がないので岩壁を這ひながら、ポンとむかふに投げた金剛杖が、みごととまるとみへたが、はづみがつきすぎたのか、數丈の斷崖へころげおちてしまつた。しまつた、あきらめて行かうか、どうもあきらめにくい、杖には、白馬、燕、槍、その山々のしるしがついてゐる。が、私だけだつたら、どうしてもこれは、あきらめなければならなかつた。幸ひ佐村がゐて、勇敢にこの斷崖を下つてくれた。一つたゝけば、その邊の土砂は、みなザラ〳〵と崩壞した。佐村は、非常な苦心をして、非常な長い時間を費して、やつとひろつてくれた、佐村のからだが、岩にかくれて、ながい間みへない時、非常に心配になつた。

いやなみちだつた。四里のみちに八時間をつひやして、漸く藤橋につき、藤橋ホテ

ルに入る。翌日、藤橋をたつて千垣に出で、縣營鐵道によつて富山にいで、電車で富山驛にゆき、その夜直江津に一泊して、翌日正午無事松本歸着、淺間温泉の旅宿に入つて、連日の勞苦を流し、その夜の汽車で東京へかへつた。

富山の驛で汽車にのらうとすると、わざ〳〵よびとめて、「どこから來た」と、きく人がある、「信州から山越へで來た」と、いふと、その人は、「ほう信州から山越へで」と、大聲をあげて驚嘆した。

直江津の町をあるいてゐると、杖をついて腰にわらじをさげたのがおかしいのか、四辻などで、四五人も立どまつて私共をみながら、何か話しあつてゐた。

淺間の宿では、早速同志の人たちがかけつけたが、肝腎の坂西は、演習地へいつてしまつてゐた、四五人の人と山を話ながら、またさくらんぼうをたべて、ビールをのんだ。

淺間と、さくらんぼうと、ビールと、山の話とではちまつたこの旅行は、淺間と、さくらんぼうと、ビールと、山の話とでしまつた。先づ坂西の報告をきいた人たちの話をきくと、山では、坂西の行動が、何かにつけて一番立派だつたようである。

（天正十五年八月十四日、午後四時二十五分、擱筆）

（八月一日に筆をとりはじめて、十五日までに前篇後篇ともに書きあげてしまふ筈であつたが、用ができて、四日ばかり執筆ができず、その外にも故障があつて、漸くかけたのがこれだけだ。はじめはこれを後篇にするつもりで、それが勿論順序であるのだが、去年の山の印象のところ〴〵がぼやけてゐて、なんとなくまとまりにくいのに引かへて、この方の印象はあざやかでもあり、時に、感興の流るゝごときものがあるので、この新鮮な感じを前に載せることにした、長崎村らんせん莊にて、著者。）

二、白馬、燕、槍の山々

白馬山

星野君を、天業民報社の編輯局にたづねて話をしてゐると、そこへ、信州松本の村山君がやつて來た。信州の客をむかへたので、話はしぜん日本アルプスの事になつた。ところが、日本アルプスについては、前年あたりから星野君と、一度一緒に行かうといふ事になつてゐたので、信州の人の顔をみながら、日本アルプスの話をしてゐると、なんだか急にいつてみたくなつた、で

「どうだ星野君、ことしは、おもひきつて一つ、でかけようじやないか

といふと、星野君も、

「よからう、行かう

と、早速賛成した。話がかうなると、村山君は、日本アルプスをまだ知らないくせ

に、信州人たるの故をもつて、さかんにすゝめかける、とう〳〵ゆく事にきめて、では一つ松本聯隊の坂西大尉に調査を命じようといふ事にまで話がなつて、さしも多年の懸案が、この一二時間の會談ですつかり解決された。因緣といふものは妙なものだ。いくらいきたい〳〵とおもつてゐても、いけない時にはどうもいけない。いま行かうとはおもはなくつても、かねぐ〵いきたいとさへおもつてゐれば、いくべき機運？　とでもいふものがくると、すぐいけることになる。

間もなく、坂西から調査報告がとゞいた。陸地測量部の五萬分の地圖で日本アルプス全部をつなぎあはせた大きな圖面に、赤鉛筆と青鉛筆で、大體の縱走路と、宿泊豫定地と豫定の日取とが記されてあつた。その外に矢野氏の「日本アルプス登山案内」が一冊、坂西の事とて、さすがに用意は周到をきはめてゐる。日本アルプスの登山といふことは、これでまづ、全く具體的になつた。

七月六日、朝の汽車で新宿をたつた、この日取りは、登山としては少し早いといふ説もあつたが、はやい方が山がきれいだらうといふので、わざと七月にはいると早々ゆく事にしたのである。一行は、星野君、私、神崎、齋藤の四人であつた。甲州路へさしかゝつて、汽車が、山間の小驛にとまると、神崎が、すばやく下りては、野菊や月見艸などをとつて來て、座席をかざりたてた。山のぼりの序曲としてのこれらの動作が、しば〳〵一行をたのしませた。甲信の國境にさしかゝると、時々雨がおとづれた。八ヶ岳につゞいてゐる廣い野に、雲がひくゝたれて、細いほそい雨が、靜に〳〵、プラットホームを漫歩する人の頰に、折々ふれる。夜、松本について、すぐ淺間の溫泉へゆきそこへとまつた。一ト風呂あびて、晩餐が愉快にすむと、星野君が委員長になつて、西澤村山などの山岳委員と明日の行程をきめてくれた。その結果として、まづ第一に白馬を訪ふ事になつた。

白馬へむかつて、宿をたつたのは翌日の朝だ。一行はあらたに西澤村山の兩君を加へて六人になつたのでだいぶにぎやかになつた。松本をたつて大町への車中、信

州の山についてなんの知識もない私共は、西澤君から、これが有明、あれが常念大天井と敎へられて、その立派なすがたに胸をおどらしながら、あすといふ日こそ、多年戀ひこがれた、日本アルプスのふところの中に飛びこむのかとおもふと、四十男の胸も、青年のようにおどるのである。ときめくこの胸、この心、山といふものは、どうしてかうも、人に、若い感情を起させるものであらうか。めざす白馬は、ときくと、白馬はずつと遠いので、こゝからは見へないといふ。遠くて、みへないといふことが、白馬といふものをなんだか大層大きなものに感じさせる。だがしかし、そこにもこゝにもあるこの大きな山をみすてゝゆくのが、惜しいような氣もする、また何も、みへないような、そんな遠いところへいかなくつても、手近な、この山々で十分だといふような氣もする。しかし、十分だとおもはれるこの山々を、格別問題ともせず、人々は特にゑらんで白馬へといふ位だから、その白馬といふものはまた、どんなに偉大で、どんなに立派だらうかと、期待が一層深くなる。そう

してその期待はずん〳〵成長する、きたいな物だといふ言葉は、こんなところからでもいひはぢめたものかも知れない。

一時間ばかりで大町へついた。すぐ自動車で四谷へむかふ。およそ自動車といふもの、いかなる場合、いかなるところでも、かういふ目的の旅としてはあまりありがたいものではないのだが、それほど度しがたいものではあるのだが、今、山へむかつて疾驅してゐるこの自動車を考へるとき、不思議にもこれは、一つのおもしろい感情のあらはれである。こゝでは、自動車といふものがもつてゐるものゝ中で、たゞ一つ、疾驅といふ條件だけをあげる。この自動車は、山へむかつて疾驅してゐるのだ。しかしそれは、たゞ、自動車が疾驅してゐるといふのではない、ほかの場合はともかく、今私共の場合、私共が、山へむかつて疾驅してゐるのである。つまりこれは、この疾驅は、山に對する私共の感情のあらはれである。そうみた時に、この自動車よ走れ、

ゴルキーの「ふさぎの蟲」(長谷川二葉亭譯)で、粉屋のチホンは、自分の馬車をひいてゐる馬に鞭をくれて、「とつとと走れヱ」といふ。チホンは何を走らんとするのであるか、今、私は、山へむかつて走る。「この自動車よ、とつとと走れヱ」。チホンが人生の走り、寂寥からのがれんとしての走り、今、私の、人生の走り、それは、大なるものに向つての走り、眞實なるものへむかつての走り、自然なるものへむかつての走り、さびしくして花やかなるもの、花やかにしてさびしきものへむかつての走り、それは實に、走らざれば止まざるの走り、この心持が、甚だ好ましからざるものではあるが、この場合、この自動車の走りで、あらはされてゐる。この走り、それは疾驅である、私は今、驀然として、山へ殺到せんとするものである。

私は、この疾驅を享樂したくなつた。自動車よ走れ、韋駄天のごとく走れ、摩利支天のごとく走れ、この走りによつて何物がえられるか、この走りによつて何物がつくられるか、この走りによつて何物があらはされるか、この走りによつて、いかなる事が打開されるか、この走りによつて、いかなる勢ひが示されるか、そうしてつくられるか。私は、この疾驅を享樂したくなつた。この勢ひにのる、この走りを走る、はづみをつける、はづみがつきさへすればなんでもすぐできるような氣がする、どんな事でもすぐできるような氣がする、大地はこの走りに共鳴し、天はこの走りに擊節する、風はこの走りに吟じ、光りはこの走りを追ふ。私はこの走りを享樂する。微妙なる衝動、力の源流、わきいづる我が心の泉、滑に流れ出るしかしながらこの強き感激。自動車は走る、この走りによつて示されたる我が恍惚。

私の疾驅するところ、そこにはどの部分にもみな渦卷きが起る。私の疾驅は、ほとんど、その渦卷きを起さんがための疾驅であるようだ。ものみなはこれによつて起ち、喚呼してこの車をむかへる。日本アルプスの空氣に、かくも大なる震盪を與へて、私は、山に入るの快を、味ふ。

私は、私の感情の躍れるをみて、山の活けることを痛切に知る。私が、自然にむ

かつて亂舞しつゝその熱情をうつたへ、その熱情によつて山の秘奥を知り、秘奥を知ることによつて、自然と人とのめでたき融合を策せんとする私は、今度の山行においても、恐らく、うべきものゝすべてでないまでも、必ずその一部をうるだらう、日本アルプスの一部は、必らず私の生活の一部となるだらう。

みようによつては、自然もまた人だ。勿論、人もまた自然である。自然の肌は、ひゞあかぎれで一ぱいの、おさんどんの手よりは、やはらかでもあり、きめは無論こまかい。もし男女の情事が、自然のようなやはらかさと、けだかさと、巧みさとでできるものとしたら、それは、何といふ美さであらう。

あの、山のふくらみ、美いはだ、しげれる木、その下を流れるたにがは、その谷川には音がある、木に風がわたれば、木はなめらかにさやさやと鳴り、水は、激情を滑澤ある色と自由なる運動とによつて、むせぶが如き快感に泣く、谷川の水は、流れて湖に入る。自動車は、今、木崎の湖畔にきてとまつた、晝食だ。まづ一ト休

み、人々は、ホッとして、靜な心持で、湖畔の亭に入る。

湖畔は、靜な心持だ。たゞ、このみちが糸魚川街道で、湖が、それに沿ふてゐるといふことが、何やら、湖としての物足りなさを示すが、しかし、旅人の身になつて考へてやつたら、この湖が、街道に沿ふてゐるといふ事が、どれだけ旅人の爲めの幸福であるかはいふまでもない。だが、越後から東京へ米つきにきて、越後へかへる人が、果してこの湖水をたのしんだかどうかは、もとより不明の問題に屬するが、しかし、その人たちとても、この湖畔の茶屋にやすんで、こゝで辨當をひらいた時は、さすがに「いゝ景色だなア」と位はいつたらう、恐らくいふことは忘れなかつたらう。

とにかく湖畔は靜だ。この湖が、街道から二三丁もはなれてゐたら、もつと靜だらうが、それは瓏をえて蜀を望むといふもの、今はただ、この、水に臨める靜な茶亭に、木崎の赤魚を味へば足る。赤魚の燒けるのをまつ間、欄によつて、湖上の展

望をほしいまゝにし、かねてかはけるのどをうるほす。

やがて赤魚は焼けた。にぎやかな晝餐がはじまる。だがこの赤魚の味は、期待した程の味ではなかつた、どうもあまりうまくなかつた。そういへばこの木崎湖も、實は、期待したほどのものでなかつた。もとより惡からう筈はないが、實はもつといゝかと思つたのだが、併し、これもまた、瓏をえて蜀を望むといふものか。

この湖水は、東西？が狹く、南北？が長い、その長い方が街道にそふてゐる、そこに、湖水に必要なさびしさが缺けてゐるからであらう。湖岸に相當屈曲はあるのだが、以上の爲めに、あかるさがすぎて、淺い感じになるのかも知れない。

が、何といつても湖水だ、靜にたゝへられた水をみるといふことは、人生まれにあふの愉快さにちがひない。食後、船をうかべて、湖を愛し、水を愛す。だが、どういふものか、この、湖水といふものにある船に限つて、櫓にくせがついてゐて、おしにくい。重い。それに、船がいつも水にうかんでゐるので底がきれいでないせ

いだらう、船あしがおそい。湖を味ふとしては、すこし輕快な感じをかく。だが、今までの自動車の疾驅が、この、靜かな、おそい船のあゆみにかはつた時、自然と人とは、どんな風な接觸をするだらう。今はたゞ、人も自然も、たゞ、ひたるのだ、とけあふのだ。さきに、おそろしい勢ひでかきまはされたものが、こゝで、仲よく一しよになるのだ。なんだか、人と自然との關係を、私は、船でまとめてゆくような氣がする。こうしてこいでさへゐれば、人も自然も、すら〳〵とまとめられて、調合されて、あんばいよく、身と心とにはいつてゆく、ちよいとみると、自動車で疾驅する事と、船をゆるくおす事に、何の聯絡もないようだ、それでゐて、その二つをよく味ふと、決局それは、一つの事を完成せんとする運動に外ならない。

星野君の船は、神崎がこいで、齋藤もそれにのつてゐる、その船は、むかふの岸についてみんな上陸したようだ。私の船には、西澤村山がお客樣然とのつて、たゞしこれは船がこげない、もしこげるとしたらそれは白河夜船の方で、湖上の船とは

何の關係もない。それにしても、兩名のこの夜船子は、湖上にうかんで何を考へてゐるだらう、やはり、むかふ岸に上陸したいとでもおもつてゐるだらうか。私はこの湖上に、しばらく湖を味ひたい、水を味ひたい。

やがて、風が出て、雨がおとづれた。風をともなつた雨は、荒く湖面をうつ。よし、よし、これもまた山の旅における、なつかしい情景だ。やさしい湖に、たちまちおそひ來るあるさびしさ。このさびしさは、たゞ湖水だけではできない、雨と湖水とがあつて、はぢめてこのさびしさ、たゞ雨だけではできない、雨と湖水とがあつて、はぢめてこのさびしさがわく、そうして、そのさびしさを深くも味へるといふことは、湖上に、船をうかべてゐればこそだ。

霧につゝまれた山からふりそゝぐかとおもはれる雨は、つめたく我が頰をうつ。櫓をおす手の甲はぬれた。雨は身うちにしみこむ。山に何物かを求める旅にふさはしいではないか。風がはげしくなつた。左舷に風がつよくあたるので、櫓がおしにくい。ともすれば風におされそうになるのを、うんとふみこたへて、へ先を風の正面にむけなをすと、船あしはおそいながらに、スッ〳〵と出る。人生、どんな困難な事が起つても、またその困難がみちに横はつても、正面からぶつかれば、恐るゝに足りない。たゞ側面からくるものは、小さなものであつても、それがかなりな妨害になる。一つの目的にむかつて邁進するものにとつては、その邁進力の强さは、たとひ前面の敵がどんなに手ごはからうとも、打ち破らずにはおかないが、わきからちよつかいを出されるのが一番邪魔だ。

船を湖畔にすてゝ、再び車上の客となる。木崎湖よさらば、再びこの湖畔をすぐる時、かつての客は、すでに白馬の秘奥をひらき來つて、山をうつせるその影を、再びこの水にうかぶべきか、人生いひつくしがたし、たゞし、今日の人は明日の人にあらず、昨の人はつひに今の人にあらず、こゝにみし我が常寂のおもかげは、そをうつせしこの湖において、　再びみるをうべきか、否乎。さらば木崎湖、その赤

魚よ、靜にねむれ、おもふにわれは再び汝をおどろかさざるべし。

さて、自動車で、湖畔を疾驅するの快はまた格別だ。あゝ湖、湖、湖畔、湖畔、大町から四谷、僅か三四里の間に湖水が三つもある、なんとこれはめぐまれた事だらう。三つが三つとも、いづれも、全然違つた特色をもつてゐる。やさしい木崎。愛すべき中綱。これは小さな寶玉の樣に、この山間のかざしのたまといふように、非常に小さく、しかしばかに落ついてゐる可憐な小湖。青木は大きくて變化があるらしく、そうしてこれは凄いそうだ。ところで雨は、木崎を離れるころからしだいにふりしきつて、雨の中綱にちらと溫情の一瞥をしめした自動車の人は、今、青木湖の模糊としてけぶり、まさに憂愁の、湖をおほはんとするに、明日の天氣をおもひわづらひつゝ、しかも、疾驅して、やがて山路にさしかゝる。

何といふ峠だか、名をきゝもしなかつたが、その峠を下りつゝある私共の車は、たちまち前面にゑがきだされた大景をみた。峠の下は雄大なる凹地である。ゆたかなる野。しげれる林。そのいくつもをあはせ有したこの凹地はうつくしい。景も、大きくなりすぎると、却て雄大の感じにとぼしい。大きさにもやはり手ごろの大きさがある。たとひ小さいながらも一つの森、その森をあはせたいくつもの森、また森といふほどでもないがいくつかの木立ちを一ト目にみおろす時、個々にみてさへ相當なものが、苦もなくいくつもあはせられるといふだけで、かなり大きなものが感じられる。そうしてこの凹地の前方の天半に、數おほくの雪溪を有した大きな山がみへた。たれしもこれを白馬だらうとおもつた。ちがつた、これは大日岳であつた。おもふに白馬は、この山彙の王である、そう輕々しくそのすがたをあらはすものではない、などとだれかゞいふ。しかし、このただ一つの山が、私共に、きはめて鮮明な山の氣分を味はゝせた。

自動車のこゝろよい反動。この反動がいやな時もある。いやな時の方がおほい。そういふ時は、快い反動ではない、しかし、山といふものに對して、心がおどつて

ゐる時、そういふ時は、自動車のこの反動も、時としてこゝろよく感ぜられる。今、それを感じてゐる。何かしら心のときめきを感ずる迄に、この反動に酔ふ時がある。今、それに酔ふてゐる。恍惚、これはいかなる恍惚であらうか。我が指頭におこる微妙なる運動。たばこの煙りが紫にたなびく、その紫は、指頭から起る。我が指にあやつられるこの紫の煙り。我が指にまさぐられるこの紙巻たばこのさはやかさ。潤澤な感じにながれ出る心のいづみ。何かしら神秘の洞穴の中にさぐりいでたるこのゆたかさのねばりとうるほひ。これはいかなる恍惚であらうか。はた心のときめきであらうか。私は、山といふものが、あらゆるものを通して私にせまりくる心よさに隨喜する。その力の大きさに驚嘆する。今こそ山を禮讃しよう。もう山を、禮讃していゝまでに、我が心はできた。これはおそらく私ばかりではあるまい。山を下つて平なみちをはせ、村いくつかを越へて、ほどもなく、私共は所謂白馬館について、車を下りる。

白馬館は幸ひと閑散であつた、まだ山がはやいせいかも知れない。閑散にこしたことはない。私共は、二階の、山のみへる所に室を求めて、みな〳〵くつろいだ。まだ雨はやまない。立ちまふ霧の間に、杉子や槍の一部がみへる。山が、裾から頂上まですつかりみへないといふことは、山をみるについて、非常な物足りなさを感ぜしめる。だれしも山の頂上をみたがる、そうして山の全容をみて、その山にうなづきたい。だが、實際に山を雄大にみせるの術は、山頂を雲につゝんで、その雄偉なる胸膈をみせることだ。そうすると山が非常に大きくみへる。雲がとれたらどんなに大きいだらうとだれしもおもふ。あついヴェールをかけた女。あゝこの頃の洋裝の女にはあのヴェールをみることができない、ヴェール、女の洋裝において尤もうつくしさを感ぜしめるあのヴェール、洋裝の女がもつてゐたたゞ一つの詩、あれをもうみることができない。今の洋裝の女は破廉恥だ。斷髪とは、どうしても相いれないあのヴェール、今の世に、あれを用ふる、やさしい女はないか。あのヴェー

ル、あゝあれは、なんといふみごとな影であらう。うつくしい女の心の影。今の女が、しかも日本のなりをした女が、グル〳〵とくびをつゝんでほゝづきのような形にしてしまふあの不體裁な變テコなヴェールといふものとは、生れをことにし、そだちをことにし、無論効果は、全然その反對の方向においたうつくしい洋風のヴェール。山の頂きに雲がかゝつてゐるのは、このヴェールである。あついヴェール、欲望は、そのヴェールをそつととつて、このうつくしい人の顔がみたい。蜀山はいふ、「お富士さん。霞のころもぬがしやんせ雪のはだへがみたうござんす」、オー蜀山人しばらくでした、山について、あなたの歌をおもはふとはおもひませんでした。私は今、私において、自然と人とを融合せしめ、そうしてまた、過去と現在とを一致せしめました、あなたの歌は不朽です。

雨はまだ止まない。一同は甚だ無聊だ。此の間に、あすの山のぼりについて、一つ、からだをねつて置かうではないかと、衆議一決して、十種競技を行なつた。十

種競技は勿論新案の競技ばかりだ。指ずまふ、脚ずまふ、すね押し、腕ずまふ。枕曳き、そろばん倒し、すはり相撲、くびつぴき、等々々、したゝかに笑ひ興じて、その間一座は引くりかへるようなさはぎだ。

そのうちに幸ひ雨はやんだ、雨がやむと急にあつくなつて來た。雲がわれて青空がみへる。日の光りがさつとさす。さああすは天氣だ、そうなると、ぢつとしてゐられない、みんなは競技につかれたか、茶をのんだりねころんだりしてゐるが、私は齋藤と神崎とをつれて散歩に出た。

白馬館の前は糸魚川街道だ。廣い往還に人どほりはなく、路面にはところ〴〵に水たまりがあつて、それが日にかゞやき、ねむれる如き家々からは、時として人のおもてに出ることもあるが、總じて森閑としてゐる。あゝのんきな氣分だ。靜なみちだ。あすは山へのぼるんだといふ、非常にたのしい心持を、胸におさめ、おさめきれずにそれがほとばしり出ようとするその心よさを、ぢつと押さへて、靜なみち

を、ぶら〳〵あるく氣分は實にいゝ。

齋藤も神崎も、みちの左右の草原にある花をつんでは、手にためてゐる。その中のにほひの高い花を一本とつて、私は、そのにほひをかぎながら、春のような心持で、遠く、この、越路につらなれる、信濃の國の、奥ぶかき山間のみちをあゆむ。愉快だ、雨はやむ、あすはいゝ天氣だらう。今日ふられても仕方がない、それだのに止んだ。日の暮れるまでの時間はまつたくめぐまれた時間だ。とんだ儲け物だ。この間にゆつくり山をみよう、また、山を心にゑがいて、靜にこの山村を味はふ。白馬といふ山がなければ、糸魚川街道などいふところを、私の生涯の記錄の中にみいだしえたかえないか分つたものではない。白馬といふ山あればこそ、たま〳〵この山間にさまよひ來て、麗日のもとに、さびたる古驛としたしむ。旅といふことは、何と、心をひろくすることであらう。

三四丁ゆくと、大きな川へ出た、これは松川だ。橋全體が腐れかゝつて、ところ〴〵欄干のとれてゐる、古びた、殆んど過去の橋とでもいひたいような松川橋の中央に立つて、上流をみわたすと、白馬と、槍と、杓子とのならび立つ大觀が、川をあはせて一層雄大に感ぜられる。散歩にでるとき、おもてへ出たら、定めし山はみへるだらうとは思つたが、こんな雄大な景にぶつからうなどとはおもはなかつた。山に水はなければならぬ條件だが、別して川は、水の中での最優等の條件である。いゝことにこの川は大きい、水はにごつてはゐるが、(たぶんけふの雨でだらう)鞏固としてながれてゐる。そうしてこの川では、白馬の連峰をみるのに、川をたてにして、たてなる川の正面に山を併せみる。流れを横にしてみるのとは、これは感じが全然別で、こゝでは、山と川との關係が全然一體である。巾からいつて非常にひろい河原、たてにみて、非常にながい河原、松川橋からみる白馬の連峰は、こゝに尤も特色ある風貌を構成する。

げにも、山といふものは不思議な存在だ。山が、人に對した場合、山は、あくま

でも人を壓するが、壓せられても人は、少しもそれが苦にならない。今しも白馬の大岳は、私の眉に迫り、私の頭上におひかぶさる樣であるが、その壓迫が、苦にならないどころか、却て私に快感を與へる。山は、不思議な存在である。それは自由なる存在である。きはめて自由なる存在である。山は、人を壓迫するとはいつても、たゞ人をおしつけてはゐない。壓迫することは、山が人の中にはいることである。すなはち、人が山について壓迫を感じたといふことは、山をうけいれたといふ事である。山について、壓迫を感じつゝあるといふことは、山を、うけいれつゝあるといふことである。

私はまづ山に壓迫された、まさに壓倒されんとした、しかし、橋の上にぢつとたつて、山をみつめてゐるうちに、山の自由さは、やがて私の自由さにかはる。まづ私に加はつた由は、こんどは私に加へられる山である。今度は、山が壓迫を感じる番だ、それには、この、山と水との配置が、まことに適當である。

野にたつて、野のはてにゑがきだされた山をみる。山と人との關係はどこでもおなじだ、が、これを適當に媒合する機關があると、この接觸は、非常に順調に、そうして迅速に、かつ巧妙にゆく。今の松川の場合がこれだ。この川は、こゝに流れて、その廣い川幅の中に、白馬と、槍と、杓子との三大岳をおさめんとする。みたところこれは、白馬の流す川である、槍の流す川である、杓子の流す川である。これは、山の放射である、山の放流である。きはめて自由なる存在、山。山自體は動かないとするも、動くものを、かくも無限に放射する、かくも無限に放流する。この放射は、人の胸を射る、胸におさまる。この放流は、人の胸にながれいる。山は自由なる存在である、その自由さにおいて山は、動くものを無限に放射し、放流する、放射と放流とには、眼にみへるものもある、みへないものもある、流れる川は、眼にみ、耳にきかせ、そく〳〵と人に迫る、これは、山の眞情を流露せしめたものである、が、人の胸を射た山の眞情、人の胸に流れ入つた山の眞情の果てはどうな

る、流れは其儘人にとゞまるだらうか、とゞまらない、喜びとなつて山へかへる、それは、人と自然との融合である、たてに流れる川は、人の心を山にかよはす、喜びを山にかへす線である、山を前にしてそこに林があり、丘が横はるのとちがひ、この川は人と山とを直接にする。

松川は、もつて、日本アルプスの一名勝中の尤とするに足りる。人もし白馬にのぼらんとするならは、白馬館より、或は自動車より、たゞちに白馬を訪ふ事なく、必らずこの松川を訪へよ、こゝに自然の、綜合せられたる、而して大なる流動を感ずるだらう。

くされた橋板に、日はうらゝかにあたる。私共は、橋板に腰を下し、あしを川の中にぶらさげて、川の音をきゝながら、山にみ入つた。

私は、山をみる時に、よく、奈良の佛さまをおもふのだ。奈良の佛さまといふのは、あの、美しくきざまれ、或は鑄られ、ぬられた美い佛さまの事である。それは、

日本の藝術史における、もう再び來ようとは思はれない黄金時代。また、日本の文明史における一の黄金時代。日本の宗教史においてもやはり一つの黄金時代。その時代につくられたすぐれた佛像彫刻、及び建造物、それらをおもふのである。

その佛さまの美さを、我々凡夫が、一ト口になんといひようもない。たゞ一ト眼みてすぐ感ぜられるのが、その佛の、絶對的な安定である。どの佛像も、實によく安定してゐる。あれをおもふのである、山をみて。あれは、山の感じである。佛の臺座は、隆起せる地盤をおもはせる。藥師寺の、藥師如來の臺座のあの安定は、山を解するものにあつては、きはめてよく解せられる、そうしてそれは絶對的な安定さである。

あゝ、藥師寺金堂の藥師如來、これほどみごとな安定の相を、私共は、他に求めることができるだらうか、この佛にあらはされたる、肩と膝とのつりあひこそは、實に世界にたゞ一つのものである、それほど甚深微妙なものである、この、肩と膝

とのつりあひより、世界の萬物は發生するとみてさしつかへないほど、それは、實にみごとなる安定である。この、肩と膝を、百年みつめてゐても、人はあきることを知るまい、それは、この肩と膝よりして、無限なる創造、すなはち無量にして無邊なる創造をなしうるからである。つり合ひにおける絶對的なもの。安定における絶對的なもの。この像において人は、眞に完成されたものをみる。

この、佛の、肉身についての現實的表現は、山といへども、或は容易に近づきえない秘妙を示してゐるかも知れない、しかし、本尊としての佛像の構成において、この像の臺座の示すところは、明かに山の感じである、金剛寶座、それは、山を表示したものとみてさしつかへあるまい。

山のすがたに、佛の像をおもふといふことは、聯想のうつくしいものとして、また適當なものとして、いろ〳〵な意味において興味ふかいものである。美しい山には、さながらに佛身そのものゝ美さをみるようなのがある。この、佛といふ聯想に

おいて富士をみる時、富士はさすがに山の王である。

私は、富士をみながら、あの、富士の大きさにおいて、しかも非常に輕い感じをうける。藥師寺の本尊をみながら、あの小さなものにおいて、非常に重い感じをうける。天より下つて地に座せる人、地よりわきあがつて天につきいれるもの、富士はほがらかにうたはんとしまた飛ばんとする、佛は――――あゝ、山を語らんとして、つひに佛を語つてしまつた。

昔めいた小説ならば、こゝで閑話休題といふ所だらうが、これは閑話ではない、しかしこゝいらで休題することゝしよう。かうして、私共は松川橋の橋のらん干によりかゝつたり、橋板に腰をかけて、川の中にあしをぶらさげたりして、あくことなく白馬の連峰にながめいつたのだ。これが、何ともいへないほどのどかな氣分なのだ。腰かけてゐるこの橋板、たつてゐるこの橋は、ずゐぶんよくいたんでゐる。馬がとほると、少々けんのんなようだ。ところ〴〵、らんかんがくされてとれてし

まつてゐる位だから、馬が通らなくつても、少々けんのんなようだ。しかし、そのけんのんさ、こゝではけんのんさは、古さをいふことになるのだが、そのふるさ即けんのんさがあつて、なんだか氣分が、一層のんきになるような氣がする、恐らくこののどかな氣分の一半は、この、けんのんな橋によつてかもされるのかも知れない、もしもこれが、新造の橋でゞもあつたならば、この感じの一半はこはされるかも知れない。もしもこれが、ペンキ塗か、鐵筋コンクリーかの橋であつたならば、山と川との綜合が、橋によつて破壞されることをなげくの一齣を、おそらくこの紀行に加へなければならなかつたらう。こはれかゝつた橋も、時として、却て樂な氣分を與へる、一つはそれは、こはれたといふことによつて、人間の貧弱さを、自然に對して耻ぢてゐることにもなるからであらう。

川むかふの村が、木立や山のあんばいで、おもむきありげにみへる。みな〳〵手帳をだして、スケッチなどする、殘念ながらみなできない。できないことの方がこの場合どれだけいゝか知れない。できない事が少しも苦にならないだけ、私共は、このゆたかな自然に一如してゐたわけだから。

そろ〳〵たそがれがせまつて、私共が、川を離れようとする時分、星野君などもやつて來た。かへりかけた私たちも一しよになつて、みんなで河原へ下りてみたり、砂防の突堤の上にさいてゐる花を折つて、山神をまつつてみたり、さま〴〵なことに打ち興じて、やがて、こののどかな野の夕べに別れをつげた。

風呂をあびて、湯一面にシャボンの垢のういてゐるきたなさをよくおぼへてゐるが、その夜の晩餐がどんなであつたかは、不幸記憶がない。たゞ、その夜のねむりは、のみの爲めにさん〴〵苦められて、夢、はなはだまどかならず、暗中に模索して、求むるものはのみか、のみでないか、轉々反側といふもちと仰山だが、とにかく樂な一夜ではなかつた。あくる朝、出發の支度をしながら、この寢不足が、ちよいと氣になる。のみの多い宿。山の宿としては、これはもとより當然な事で、事に

よつたら、これが山の宿としての一つの情緒になるのかも知れないが、久しくかういふ旅に出ず、旅なれない私としては、蚤はかなり厄介な事件であつた。そうして、旅にあつて一番困るのは寢不足だ。

朝くらいうちに起きたが、御飯の支度が手間どれたり、強力がこなかつたり、はや立ちといふわけにはゆかぬ、山の宿としては、かういふ事は心すべきことだ。

さていでたつとて、土間にたつた私の姿は、麻の洋服、わらじに卷ゲートル、帽子は麥の中折れ、糸立てをきて、金剛杖、腰にアルミの水飲みをつけてゐる、それに雜品をいれたカバン。一行の服裝は大同小異、たゞ星野君がアメリカの義勇隊のような帽子をかぶつたのが異彩である、しかし、齋藤は女なので、一行の中の異彩といへば、なんといつてもこれが一番の異彩である。星野君は、この異彩のために、特に一人の強力を必要とするといふので、二人の筈の強力を三人にした、すなはち一行は九人といふ大連、宿のものに送られて、白馬館の横の小路がそのみちぞと、案内者のあとを靜に、山へとあゆむ。

一里ばかりの間は他奇もなく、田圃をすぎて野、といふあんばいに次第に高みになる。やがて、追分けへ來て川をわたると、こゝからみちは「北股入」りと「南股入」とに分れて、「南股入」は白馬槍へのみち、めざす白馬は北股をのぼるので、今ふむみちは、杓子ケ岳の裾にあたる小日向山の一部だ。白馬の山の門番といふわけでもあるまいが、この追分に一軒の小屋があつて、そこに備へつけられた帳面に一行の名をとゞめる。

東京なら小日向臺、白馬では小日向山、何にしても日あたりのよさそうな、やはらかそうな、ふつくりしたいゝ感じの山だ、草も木も、なか〳〵よく茂つてゐる、北股川ともいふべき谷もいゝ。さればとて、大して特色のある山といふではない。たゞこのふつくりした豪宕味、ひろ〴〵としたゆたかさが、白馬や杓子といふ大岳のふみ段としてまことに恰當だ。若い落葉松の、新緑の、おどろくほどなあざやか